

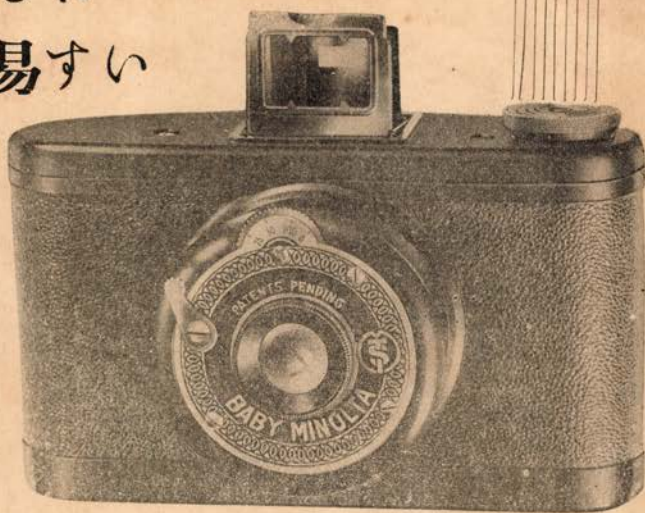
川柳の雅集
★編輯

川柳の雅集

NO.1 VOL.XIV

手に軽るに
寫し易すい

ベ
ビ
ー
ミ
ノ
ル
タ



¥ 9.50

ヴェスト判 兼用
3 × 4cm判

連寫ケース ¥ 2.00

カタログ進呈

淺沼商會

東京市日本橋區室町
大阪市南區順慶町

全國寫眞機店
百貨店にて販賣

誌 ♣ 雜 ♣ 柳 ♣ 川

號 一 第 卷四十第

不朽洞句稿

麻 生 路 郎

お 年 玉 位 なら ある 暮 の 父
友 達 に 別 れ た 時 が お 元 日
四 方 拜 の こ と も 切 抜 帳 に あ り
元 日 も 二 階 二 日 三 日 も 二 階 に 居
下 戸 の 春 壽 司 を こ ろ が し て も 笑 ひ





川柳雜誌 新春特輯號目次

題字・路郎筆

文苑

武玉川三篇研究(二)

梅本秋の屋
森東魚(一六)

川柳名句評釋

蛭子省二
麻生路郎(四)

川柳新年

生方敏郎(四)

川柳に現はれた牛のさまぐ

大島濤明(二〇)

國旗のうらおもて

たかを・あきを(四七)

川柳十徳

福田山雨樓(三〇)

土人の酒を造ろ

西田艸樂(二三)

子供の世界

森東魚(三三)

漫書セク ション 脱線正月

小川武
樋口ヒロム(三四)

川柳指導講座

塚越正光(三)

六厘坊十句の再檢討(五)

木村半文錢(三七)

行路集(短歌)

長野晴濱(三六)

川柳隨想

山本丹路(四九)



★暮の財布

久秋、陣居、縁雨……………(五三)

神様と行違うた話……………

路郎生……………(四〇)

春閑雜筆……………

吉田水車……………(五三)

街に住めば……………

高橋かほる……………(五三)

川・柳・横・町……………

不死鳥……………(五〇)

創作

不朽洞句稿……………

麻生路郎……………(一一)

近作柳樽……………

麻生路郎選……………(六)

川柳塔……………

麻生路郎選……………(三)

日本柳壇百人撰……………

諸家……………(二四)

日本名所名物川柳(京都の巻)……………

山川紫明選……………(五〇)

柳年忘れ大會……………

京阪神各支部聯合主催 朝賀大鱗書……………(五四)

一路集 十八九……………

前田五健選……………(四八)

各地柳壇……………

柳誌要目……………(六〇)

柳界展望……………

柳誌要目……………(六〇)

川・柳・案・内……………

(六五)

編輯縱横……………

(六二)

(四四)



川柳名句評釋

(6)

麻生路郎

頸筋に見惚れ八階まで昇り

默平

頸筋の美に、ほれ惚れとしてゐるひまに、エレヴェータ
ーは、早や終點に着きにけりで、ゾロ／＼と乗客を吐
き出してゐる。ホイしまつた。わしは三階の雜貨部に用が
あつたのだと云つても追ツつかない。

屑拾ひニツミ笑つて怪まれ

歌都路

迂濶に顔面筋肉すら動かすことの出来ない世の中になつ
て來た。

ルーデサツクを見つけたのかも知れないのに……。ルン
ペン氏よ、怪しむ奴を輕蔑してやれ。

兵隊のチツブ財布の底を見せ

靜豐

電車賃だけ残してくれといふ戦術もあるが、財布の底を
見せた以上、かどへ出たらたちまち兵隊意識で、ソレ、駈
け足ッ！

スキ―服右から二人目は女

一狂

男か女か、女か男か、一見してハッキリしない姿態が……
今の世のすがたとなりそうだ。

女は女らしくとか何んとか云はうものなら、あんな頭が
陳いわよと一蹴されてしまう。ヘイ僕の頭は生れた時から
ので……と云つても洒落にもならない。

六錢を貼つて興奮まださめず

玄六

内容はとんと判らぬが、斯うした瞬間をキヤツチして、「俺にもそんなことがあつたツけ」とうなづかせるところが腕であらう。

春泥へいつそ素足になりたがり

機見女

山は霞むし、こころはをどろ。歌麿ゑがくの女でなくとも、春は素足の女を招く。「ちよつと待つて」と足をくの字に足袋を脱ぐ、その姿さへ畫になる媚態だ。

家中を笑はす母の流行語

よしを

「向ひの犬、とてもエロやで」とか、「OKだよ」と「だよ」までつけて笑はれるのかも知れない。

親はごに階級のない社宅の兒

高峰

お父さんが課長だつて平の社員だつて、社宅の兒どもたちは無邪氣だ。平の社員の子が大将で、課長の子がただの兵隊さんで、軍ごつこをしてゐる。おツ母さん達はさうはいかぬがネ。

船頭もいいなご思ふ春霞

緋郎

鉢巻に唾え煙管、帆は十二分に張つてある。船は疊の上

をすべつてゐるやうだ。寫生句の上乗。

貧乏の子は秀吉をなつかしみ

三日坊

秀吉の家は貧乏だつた。秀吉は小さい時には子守をしてゐた。秀吉は鼻を垂らしてゐた。それがあんなに偉くなつた。私は秀吉が好きだ。私も秀吉のやうになりたいものだ。新店のそれもすぐ来るやうに言ひ

路郎

空函で棚をふさいで兎に角店を出したのはいいが、いかにも寒むさうだ。「何はありませんか」と訊かれても、その何がなか／＼ない。折角ある品では、お客様の方で「これではネ」とおつしやる。

閉めた戸が四五寸戻る男の子

櫻ン坊

男の子は元氣だ。「もう少し静かになさい」といつもおツ母さんからお小言ばかり。しかし男の子は、それがホントの男の子だ。

モウシオンをつけて壽司屋は握つてゐる

裕侍

この句を読むと同時に背の低い、デツブリと横幅の廣い壽司屋のあるじが、目に浮ぶ。唾こそつけぬが、モウシオンをつけて握る／＼。まぐろ、蝦、あなご等々々。



麻 生 路 郎 選

- | | | | | |
|------------------|-----|-----------------|-----------------|---|
| 秋だなとおもうて灰をすてる也 | 大 阪 | 水谷 鮎美 | 優しさが武器の女房と知らずして | 同 |
| 花賣りの雨にぬれてゝひとつ賣り | 同 | 置時計 夫の嘘に慣れてくる | 同 | |
| その他大勢首をならべてゐればよし | 同 | まだ今日もゆふべの夢と怖くゐる | 同 | |
| 灯を消せば猿に似た眼があらはれて | 同 | 十二月さわればぬくい子の頭 | 岩 手 | |
| こほろぎの死におくれたのも哀れ | 同 | 僚友に死なれた金魚冬を堪え | 福田山雨樓 | |
| 愛だなんてみんな苦勞の前借りだ | 大 阪 | この雪の下なる麥の芽を感じ | 同 | |
| 外からのいさかひさめず家に着き | 同 | 父いつも牛と一緒に起きてゐる | 同 | |



先代は呑みも呑んだがよく儲け	大阪 關本 雅幽	洋服屋小使室で待たされる	神戸 喜多 春秋
歳の瀬をちつと屏風に圍まれて	同	冬服をつくる一人へみんな立ち	同
お父さんが病氣どこかで遊んで來	同	頬杖ついてお前の嘘をさア聞かう	同
風車師走の街はいゝ天氣	同	慈善鍋要所を守るかたちなり	名古屋 吉田 水車
切花は賣切れ泥鰌居さうなり	同	開店日小鳥はうたを忘れたり	同
乞食らに後姿を批評され	同	先生も手折つて歸るハイキング	同
信號も青で嬉しい芝居行	同	笑ふのも忘れてゐたり十二月	大阪府 宮岡 白峰
十二月よく書けさうな筆を買ひ	同	働けど喰へない人等皆しやべり	同
しよがなと言ひ言ひ飛車も角もやり	同	終列車バスと並んでねてしまひ	同
散らばらの兄弟集め一心寺	同	六尺に近い男の日向ぼこ	大阪 須崎 豆秋
母だけで産んだ如くに子を育て	同	首になるのをまん中にして撮し	同
松竹梅松は母家といふ形	同	元日だ一二の三で跳び起きむ	同
節約の床業牡丹を生けられる	同	炬燵出て藝で立つ身を諦める	豊中 阿部 閑生
福壽草松にしたがひ候かしこ	同	春來れば春の姿になる袂	同
スペイン動亂こゝに酒呑む紳士あり	同	停年の元日となりしモーニング	同
滿洲へなかはは自棄を否定せず	同	アパートに妻を残して酔ひつづれ	大阪 朝田 新水
戦争だ不況だ今の間に貯めろ	同	團體の下駄に道頓堀の宵	同



署へ曳かれましたは昨日の朝の事

同

大部屋で切られる稽古してゐるなり

廣島縣

黒本 芳泉

子の欠伸 客に時計を見させたり

同

まア上れ〜と炬燵からは出す

同

年寄の意見は老ひの愚痴にされ

兵庫縣

長崎 柳秀

姉ちやんになるのよと乳貰はれず

同

かすかなる記憶を女喚び戻し

同

窓硝子きれいにふいて寒くなり

島根縣

三疊を書齋と名付けてゐる若さ

廣島

濱田久米雄

肩のこるものにマダムの銀狐

同

生活の場所とは無茶な菊の蟲

同

松茸はなかつた足の疲れよう

同

塀つゞき脳病院は音もなし

大阪

西 いわを

盃を持たすと妻は笑ふなり

大阪

橋本 緑雨

目覺しがキツチリ鳴つて腹が立ち

大阪府

妹尾 變人

石鹼も入れてくれたが一族

同

子澤山もう秋風にあはてたり

同

馘にする赤面役が僕になり

大阪

姫田 夕鐘

失策を高飛車に出る地位が有り

松山

酒井 大樓

子の指に教へられたる晝の月

同

家政婦と乳母に托して閑があり

同

放れ牛 一月一日のこの平穩

島根縣

尼 綠之助

何に損したか芦屋に貸家札

大阪

戸部 琴風

ある老人

ほろりとす酒は金より尊いね

同

九里丸と言はれ會社で人氣者

同

子を抱いて斷り言へる妻となり

京都府

明石 柳次

三人の母なる帶がとけかゝり

尼崎

川村 觀月

酒樽を背に女將の片えくぼ

同

軒店で夫婦がかりの忙しさ

同

説諭きく自轉車にまで錠をかけ

大阪

小西 落丁

長針のせわしさ朝刊持つて出る

神戸

渡邊 木履

同

寝轉んで正月ならぬ新年號



臆病を見透されまい詩を吟じ	愛媛縣	町田 承春	年頃を繪のやうにゐる松の内	同
お茶たてる稽古に父も呼び出され	同	同	子を膝に置けば氣強い妻であり	長野市 中村 猪郎
愛の價值商賣人の手にかゝり	神戸	岡田 某人	子を叱る言葉を妻に教へられ	同
干柿の村へライカの二人づれ	同	同	集金に早い餅搗 羨まれ	名古屋 稻垣 正穂
轉ぶにも兒は思ひ切り轉ぶなり	朝鮮	豊島 松女	郡部線今度の驛が見えてくる	同
言ひ負けた兒はまばたきをしてゐたり	同	同	外交員迫力のない家へ来る	今治 武田 紫陽
種馬と成り候か此賀狀	大阪	石田 沐天	公判の朝神棚へ燈をともし	同
行き暮れて舞臺は春へ廻るなり	同	同	傳統の父の屋號が氣に入らず	大阪 岡島 芳町
靴磨きながらそれでも會社員	神戸	西村 明珠	ダットサン一人前に砂煙	同
歩くかしておいて先生息を入れ	同	同	頼む事は兩手を合す啞の子よ	今治 石手 河鹿
灸を据え合うて悋氣をしたも夢	朝鮮	池田 可宵	かばつてやる自分の地位が低く過ぎる	同
雪なれば雪でうれしきお正月	同	同	金策の一本道へたゞ焦躁り	姫路 潮田 明坊
聞き及ぶ程禿けてゐぬ初對面	大	柳 大門	二階貸します老夫婦店の番	同
番臺の亭主此頃胃散呑み	同	同	恩愛のくさび重たき冬の底	大阪 竹内機見女
埋立てゝ買手はつかず物干場	兵庫縣	戸倉 普天	はゞたけば血のつながりの血がにじむ	同
秋蠅を雑誌で叩く日向ぼこ	同	同	偽造する智慧も文化の中なるか	大阪 後藤 青兒
表情を殺し月給もらふかな	今治	渡邊 曉童	父からは貰ひ母から強奪し	朝鮮 中園 利雄



負けまいとする夕闇の電車道	大阪	地黃	天國	あさつばら息子から来る未納税	今治	荒井英賀夫
男の子擦り傷なら叱つとき	島根縣	竹下	章泉	米相場下落つゞきで晝の月	金澤	荒木 立帆
よんどころない辛棒をほめられる	朝鮮	末次三角山		にげる蛇見つけた人が叱驚し	高松	楊柳 夢
停止線キツチリ止る自家用車	大阪	上山よしみ		面白さ涙を拭いて又笑ひ	大阪	加藤ライト
日曜日父が生徒で暮れかゝり	朝鮮	高原惠源太		炭ついで子の月給を待つてゐる	丸龜	馬場 浪二
うちの子も一緒に逃げて舌を出し	大阪	竹村 鉄心		愛の巢の火箸は父が買うてくれ	尼崎	山田南濃路
赤貧の中に笑ひの種見付け	島根縣	山本 勇坊		營養價值に時計が要るマダム	兵庫縣	酒井美知夫
純情を嗤ふ課長に瞳をそらす	大阪	小鹽 靜路		あの人に来てないテープ小さく揺れ	名古屋	熊澤 明央
呑むだけが養父と趣味が合ふてゐる	大阪府	黒川 紫香		花電車見せんとすれど兒は起きず	大阪	糸谷 春草
菊一鉢ミルクホールは秋になり	東京	長島 双亭		十二月正月からの借もあり	松江	勝谷山川兒
紅絹裏のあかきが中のかひなかな	大阪	原田 輝親		あおむけに寝れば張子の虎の腹	大阪	中井シナ子
小供にも赤い魅惑の康辛子	兵庫縣	田邊 由布		支拂日話と違ふ附けも来る	石川縣	勝山しざし
叱られる氣配を知つた夜の膳	名古屋	熊澤 勇香		十分間停車都會の息づかひ	大西市	濱口 七步
明日からは家を去る夜の父と母	今治	矢野虹の鷹		凡人の下から出るとつけ上り	奈良縣	嶋田 翠峰
レヂスター今日の儲けを考へる	大阪	庄司淡路坊		流し瞳で呼びそうもない懷手	島根縣	川柳亭凡愚
急停車女の膝がくづれかけ	神戸	山田 凡樂		おとなしくなれば病氣の子と思ひ	岡山縣	原 美靜流
クツシヤミが大き過ぎたる眼で見られ	大阪	畑田よしえ		一ト月ももつかと禁酒冷やかされ	大阪	今井 菊路

洗濯は四溫日和に延ばされる

朝鮮

村野キミ女

貧乏が背景だけの立志傳

長野縣

佐々木千隈

女口々にたよりない人にする

大阪

山田 菊人

傷心の肩をたいて呉れる友

大阪

松野 盤模

つき合つた友のどれもがエゴイスト

神戸

山崎海中金

自畫像の下でパイプの掃除する

名古屋

水田 蕪人

まだそんな氣でゐるのかと笑はれる

長野縣

林 幹

身の安否抜きで兄貴の叱り狀

島根縣

山本 勇坊

差入れに來る日許りの厚化粧

神戸

坂上 啓坊

置手紙我が純情を嘲笑ひ

同

勝部 海堂

昔なじみの乞食ゐる寺

大阪

山本 葉光

何事ぞ高が女に迷はされ

名古屋

星野 兄兒

火鉢かきませて女の愚痴をきく

愛媛縣

門田 雨城

同窓に苦勞の指の恥かしく

大阪

高石 登柳

母さんに倣うて遊ぶ編む手つき

尼崎

坂井 胤盈

生き延びて諦め事が當むだけ

神戸

山本 幸人

朝飯の急使へ狸寝入りする

朝鮮

村野東狂子

たゞ淋し母の保險を掛けるなり

長野縣

金井有爲郎

親分の顔色をみてトロを押し

尼崎

酒井 斗風

郊外もいゝが肥料も臭いなり

大阪

奥野 其奥

ハイキング澁柿の木へ道草し

神戸

藤井 徒歩

第二號連れた社長に會釋せず

青島

正木 翠舟

世捨人あまりに世間せま過ぎる

大阪

中村 月進

強意見母かたわらで靜かなり

名古屋

星野 上上

上りどこ無いに上れと儲けてる

高知

中澤 濁水

本と子が押入にゐた椿事なり

大阪

金井 串郎

水飴の届かぬ先に叔父は死に

大阪

岩橋 岩石

情熱の詩人冷い顔でゐる

今治

菊池 香方

次は終點車掌切符を集め出し

朝鮮

汾陽大頭領

十二月下旬なまこを買ふ陽射し

大阪

正本 水客

或る時は濡手に泡の夢も見て

島根

原 獨仙

卸屋でわけて貰つて地味過ぎる

大阪府

大阪 形水

奥様の理解羽織を着てお行き

大阪

坂 澄風

運動會哀れてる／＼濡れてゐる

今治

石手向上庵



別れとかかなしき言葉 聞きゐたり

島根縣

狩野もこ子

チンドン屋 工場地帯の手を止める

大阪

宮川 冠光

一本ときめた 寢床の バット かな

愛媛縣

近藤何毛子

友情の 極致 學校中に知れ

神戸

難波陽出男

寂しさは 遊びに行つて 呉れぬ 父

大阪

米林 舞蝶

味噌は 味噌庫裡の 釋迦牟尼肩淋し

兵庫縣

田島 破鼓

どのやうに見得を張つても 平社員

今治

月原 宵明

初旅は 宿の 要領教へられ

大阪

村瀬 琴泉

賣切れと書いた 見本も 並べとき

大阪

北川 春巢

無理をせぬ 氣持になつた 四十一

東京

村野蒼梧樓

迷信と知りつつ 枕うらがへし

豊中

金田 並木

孝行な 心も 金に負けてゐる

大阪

松下小柳子

病む 僕へ 朋輩 みんな 忙しさう

大阪

馬淵 龍城

晝線が ほしいと思ふ 氷雨 かな

今治

町田 垂柳

下の子へ 恰度 合ふなり 紺紺

大阪

淺 謙 公

さも レデーらしく すました 戎橋

大阪

中川 速水

左遷とは 氣付かぬ 様に 署長 出し

朝鮮

豊島石燈籠

鉢の 木を 偲ぶ 田家の 夜の 雪

東京

阿部佐保蘭

お別れのお 辭儀 電車に 乗り遅れ

大阪

兼田 海洋

雪となる 炬燵 やぐらの 酒も 春

京都

大和田柳童

火を 焚いて 父は 近所の子を集め

松山

芝田 靈子

一と波瀾 來さうになつた 女文字

大阪

中村 靜城

父親の 意見 こたへる 顔の色

山口縣

西口悲戀坊

もう少し 先の 易には 金が 要り

今治

長野 文庫

川 新春句會

……一月九日(土)午後六時半

於 大阪朝日新聞社三階大廣間

オサカ・マンガ・トリオ同人が席上句を漫書化して頒布其他詳細は春の樂しみとして發表せず



難 し い 課 題

川柳指導講座「重ね着」

塚 越 正 光

この稿をまごめる前に一應集句へ眼を通してらうちに「重ね着」の解釋に疑義が生じて來た、といふのは私の解釋では單衣を重ねて着るさか、布子へ布子を重ねるさか、とにかくぐはぐな着方で、上着と下着と揃へた俗に言ふ二枚襲さか三枚襲の意ではないと思つてゐる。ところが集句は私のいふやうな意味で作句してゐるものが少いやうなので、私の考へ方は關東での稱呼かとも思はれて、一應言海を見るさ（重ね着）衣の上へ衣を重ねることであるのもう一度暗礁に乗りあげたやうな氣がした。そこで路郎氏に出題者としての説を訊れてみるさ

「重ね着は寒さに向つたりした時、袷でうすらさむい、しかしまだ綿入ではごろ／＼するしそれに無精も手傳つて、下に浴衣などを襲れ着する事を言ふのです」
 といふことなので、すっかり氷解することが出來て、この稿をすすめることが出來た。

然しさうなるさこの課題はこの欄の作家には難題ださしなげばならない。といふよりも題意を狹義にまつたら、恐らく練達の作家でも作り難いに違ひない。その故か集句も案外寄りが悪かつたやうである。これを廣義にされば○丸氏の
 三ヶ日そつくり脱いでそつくり着
 や私の
 一襲しつけのまんま春を待ち
 が作例さしてかくこうなのだが、この場合作家諸君を誤るおそれがないでもない。

さて例によつて諸君の作品を一句々々検討してみやう。
 重ね着に慣れて長男頼りなし
 若しこの句が假に名句として後世へ残つたとしたら、詮穿家を悩ますに違ひない。といふのは常に「重ね着をして

ゐる長男を頼りたがる親の心持を詠んだもの」と解すのと「重ね着を着なれた長男がそれを脱いだので、何となく自分自身を頼りながる心境を詠んだもの」と解す二派が對立して論戰を演じるに違ひない。これをそのどつちに片附けるとすれば、前者なら

重ね着をして長男は弱々し

と頼りないのを具體的に表現する手法もある。

又後者なら

重ね着に慣れて自分をいとしみ

だが、これは私の考へ過ぎかも知れない。たゞさうした作句の過程を経ることも、作家の踏む道には横はつてゐることを知つて貰ひたいのである。(句主 長野縣 幹君)

重ね着をして留守番を頼まれる

その人物は描き得てゐる。これなら及第點をつけられる

(句主 大阪 よしを君)

重ね着を今は笑へぬ年となり

これでもいいのだが、慾にはもう一步突込んでみたい。

そこで

重ね着を笑へぬ年になつてゐる

と、重ね着を平氣でする自分自身に氣づいた上に焦點を置いて見たが、これは私の好みが過ぎたかも知れない。(句主 大阪市 日柳君)

漁師町さしこ重ねて梅が谷

座上の梅が谷は着膨れたのを形容したのかも知れないがこの座上是現代語ではないしまりに子供っぽい。それにさしこがこの句主の地方語かも知れないが、私達には耳障りにひびいていけない。

漁師町どてらを重ね不漁つづき

とでもして漁師町のある日の情景を描いて見たが、句主は不満かも知れない。(句主 朝鮮 石燈籠君)

瘦た手を寂しく撫て重ね着

送り假名の援けてゐるのだけを入れるなら、瘦せた手を寂しく撫で、重ね着る

だが、これでは句にならないので

重ね着にますく瘦せた手の佯びし

と句主の言ひたかつた瘦せた手をそのまゝにして見たが、これは敢て瘦せた手といふよりも、瘦せてゐるといふ全體

の感じの方がよかつたかも知れない。(句主 朝鮮 骨人坊君)

仲間から重ね着丈けが離れてゐ

せて

この句を子供の世界と解して、仲間からをもつと明瞭さ

せて

重ね着の子は縄飛へ遠くゐる

として見たが、どんなものかしら。(句主 朝鮮 東狂子君)

重ね着をしても風邪はひくものよ

君)

重ね着をしても風邪はひくものよ

この風邪は、かぜと讀ませるのか、ふうじやと讀ませるのかと聞いてみたいが、そのどつちに似た處で句にはなつてゐないといふより外はない。ひくものよなんて感嘆してゐないで

重ね着をしてあげ 仕事風邪を引き

と事實をそのものを句にした方がうなづかせることが出来る。(句主 朝鮮 大空君)

重ね着をぬがせ 坊やの歩き出し

重ね着のばあさんこたつに丸くなり

若し違つてゐたらお詫びするが、この二句の句主騏坊、大石兩君並に前の大空君は、石燈籠君と同一人ではないのかしら。所と姓と文字とみんな同じで、而もだん／＼箸にも棒にもかゝらなくなつて來るのでは助からない。尤も句までが不真面目な考へ方で句を寄越してゐると思はないが、こちらがちやらんぼらんにこの欄を受持つてゐるのではないだけに、さう勞務を強いられたいと思ふ。同一人と認めてこの二句へは手をつけないから、今後は一人一句を守つて貰ひたい。

小兒科へ末だ其の上に着せて行き

澤山着てゐる形容詞に着膨れるといふ言葉がある。この場合それを使つたらこの句主の言はうとしてゐることは、もつとはつきり言へると思ふ。つまり

小兒科へ着膨れたるを連れて行き

なのだが、子を思ふ親心はうなづいて貰へる筈である。(句主 朝鮮 惡源太君)

あれを着てこれも着て行け親心

同じ親心でもこれは惡源太君の一步手前で止まつて仕舞つてゐる。茲で足踏みをしてしまつてはよい作家にはなれないといふことだけを警告して置かう。(句主 廣島縣 芳泉君)

重ね着て寒さうに見え 瘦男

寒さうと形容すれば、見えるといふことを言はなくともいゝ筈である。そこでこの句の聲調だけを整へるなら

重ね着をして寒さうな瘦つぽち

と性の區別を撤廢すればよいのだが、それだけでは私の責任上事畢れりとはし難いので

重ね着の襟元寒く瘦せてゐる

としてみたが、どうもあまりばつとしないやうである。

(句主 高松 柳夢君)

秋深く重ね着せぬ子元氣なり

課題が重ね着なのだから重ね着をせぬ子ではたゞ重ね着を詠み込んだげに過ぎない。斯うした逃げ方は題詠に對して忠實ではない。明治時代の作家はよく斯ういふ課題のこなし方をしたものが、題詠はやつぱり課題へ眞つ正面からぶつかつて行つた方が、作の力を養ふには賢明な策だと思ふ。だからと言つて重ね着を詠んだのでは句主はうなづけないと思ふので

重ね着を肯んぜぬ子へ空つ風

と季節感を進めることにしたが、うなづいて貰へれば幸甚である。(句主 山口縣 悲戀坊君)



武玉川三編研究 (一)

梅本秋の屋
森子省魚屋
蛭子省魚屋

愈々、第三編を掲載し得る順序に進む事は満足に堪えません。句は森氏所藏原本を土臺とし、其儘に記します。當字、誤字、假名遣ひの誤謬等訂正してあります。それは昔の面影が窺ふ興味がある外に、將來古句集をみらるゝ参考ともなります。而て研究中に、自ら正されてまいるは當然でありますから、不都合はないのであります。尤も本誌に活字とする時の誤植、脱字等は、一括して御知らせ致したいと存じます。本研究に對し、初篇二篇に遡つて御通讀を煩はし得るならば補短の便宜が多であります。研究は簡易を旨とし、一日も早く進行したい念願であります。

(蛭子生)

冬嶺之部

(1) 牡丹を入れてかしこまる駕籠

省二 祖父(醫、尾州家に仕ふ)の駕籠に、少年時乗つてみた事がある。相應の廣さのものだ。が、美事に咲いた牡丹を持ち込み、崩すまいと氣を配るのでは、自らかしこ

まざるを得なくなる。

秋の屋 此の駕籠は、古川柳に多くある四手駕籠ではなく、武士または醫師の乗物である。

東魚 殿様などへ、献上しやうと云ふのであらう。即ちかしこまる所以。『連臺に牡丹も越すや大井川(水巴)が思合はされる。』

(2) 浮沓を馬鹿にして居る都鳥

省二 ウキグツは今日の水泳用浮袋に等し。人間といふものは不自由なものだに、都鳥に馬鹿にされても、どうも致し方がない。

秋の屋 昔の浮袋といふものは、小瓢二十個を布に縫ひくるみ、それを襟と腰に纏つたものだといふから、都鳥の目からみれば、馬鹿氣てゐたに相違ない。

東 魚 先年「川柳みやこ」へ、この句の事を書いたが浮沓は俚言集覧には、一木にて筒を作り漆をぬり大小三個を身につけ水泳する具なり、水心なきものに水に沈まぬ爲に出来しものなり」とある。沓形にでもなつてゐるのではないかと想像する。沓形は水鳥の浮いた形に似てゐるから、都鳥が馬鹿にすると云ふのも適切だと考へられる。

省二 秋翁の申さるるのは浮櫓の事で、小瓢を用ひたは小堀流であり、神傳流は猪の膀胱であつたなど、各流工夫するところ秘事となつてゐた。沓袋は特に沓型をしてゐたといふ事もなかりはせぬか。大筒は長二尺餘、小筒は一尺二寸餘、高さは皆四寸餘。布囊に入れ、大筒を中に小筒を左右に、其間に囊に紐をつけてしめ、左右囊の口を麻繩にて括り、端に紐を長く付、赤身にこれを着る。大筒背に當り小筒左右の乳に當て、紐を胸にて交へ後ろにし、左右の肩より前に取て結ぶ。立身にて泳ぐ事が出来る。只衣服調度を持ち渡することは難しいと古書にある。

(3) 女の知恵の青い庚申

省二 「青い庚申」なる語を用ひた句は、初編に「御神酒はあれど青い庚申」とある。原句の「青い」が「智慧」に掛つて足りないの意に用ひられて居るらしいのは、「女」とあるので推知し得るが、必ずしもさう解さなくても、よくはないかと殊更に私は考へてみた。智慧の内容は前句に因るより致方はないから、兎も角、庚申様にお願ひしてみると、極めて輕くつてみては如何。

秋の屋 女の猿智慧を、庚申の猿に懸けたものと想はれる。

東 魚 青いのは矢張り「至らぬ」の意か。庚申の夜にも係らず、男と逢ふ段取をつけるやうな場合ではないか。

(4) 鼓打女の肘は乳へ付

省二 女に應しい姿態

秋の屋 平凡に過る句で、興味が無い。

東 魚 肘がふくよかな乳を、押さへてゐる姿に、官能的な興趣を感じる、と云ふべきであらう。そこに多少捨て難い點はある、(大變目尻りを下げるやうで恐縮)

(5) 夫の盆へ殘すさかつき

省二 細君盃はうけはしたが、やはり其盃は主人の盆へ上せて置く。

秋の屋 如何なる場合か、前句が無ければ不可解である
東 魚 客へもてなしに出た女房が、客から盃をさされ
たのを、一寸呑む風をして、夫にすけて貰ふため、夫の盆
へさし置く場合であらう。

(6) さらに足て早乙女に出る

省二 事柄の急轉は、前句が判れば非常に興味であら
う。去られて里へ歸つてみれば、田植季なので、直に手傳
に出る。

秋の屋 田舎の嫁が、離別されて里に歸り、直に田植に
出るといふので、暗に農夫の繁忙期といふことを利かせた
のであらう。

東 魚 早速田植の手傳ひでもするなら、去られて歸つ
た、間の悪さが幾分減じるわけだ。無造作な田舎の趣のう
ちに、哀れさがある。

(7) おもひ出したる井戸堀の聲

省二 奈落の底で時々聲がする。——その聲が合圖で
泥や水が汲み揚げられる。

秋の屋 時々思出したやうに、聲がするといふのであ
らうが、「おもひ出したる」では、其意がよく通じない。

東 魚 土を引きあげさせる、合圖の聲をかけるので、
だから容器に土が一杯になるまで、黙々と掘つてゐるから
やや暫く間があるわけだ。或は掘抜き井戸を掘る時、矢を

突き下げるが、その時も、かなり間のぬけた時分掛聲をす
る。其方かもしれぬ。

(8) 耳も齒も浮世はなれて知恩院

省二 老人の後生願の參詣——淨土宗の私は、祖母の
お伴をして、智恩院にはよく足を運むだ。たつぷり半日は
お詣して居るのであつた。

秋の屋 腰に梓の弓を張る老體。

東 魚 大寺であれば、何處でもよからうが、前句の關
係から智恩院と据ゑたのであらう。

(9) 直切た鐘の恥しい聲

省二 餘り値切ると、賣り手にぬかりはない。恥しい
程鐘の音色が悪いのは、値切り過ぎた、てきめんの證據。

(値切るのだから、半鐘位であらう)

秋の屋 火に焼けた半鐘などであつたら、叩いても音が
遠く響かない。

東 魚 買った本人が苦笑してゐる趣、鳴るたんびに恥
しい思をする事だらう。

(10) 役の行者の行當る市

秋の屋 此の「市」は吉野山麓の上市下市で、役小角は
吉野の奥の葛城山の巖窟に、三十餘歳居たといふから、偶
には麓の市へも行つたと想像される。

東 魚 難句で自説はない。恐らく前説の如であらう。
省 二 「市」はマチと讀むならむ。

(11) 遠くから楽しみにする立すかた

秋の屋 向の方に佇立してゐる女は、遠目に美人らしく想はれるから、速く彼處へ行つてみよう、とでもいふの歟。楽しみの意が不明である。

東 魚 そば近くみたら豫想通りの美人であれかしと、楽しみにするのであらう。

省 二 二様に解せられてゐた。一は前説の如し。二は其女は顔知りで——戀愛事情も含ませる——近寄つて話をする楽しみである。

(12) よしの、山をかちる小座頭

秋の屋 吉野氷と稱する葛製の菓子があるが、それを小座頭が、ぼつ／＼嚙ることであらう。

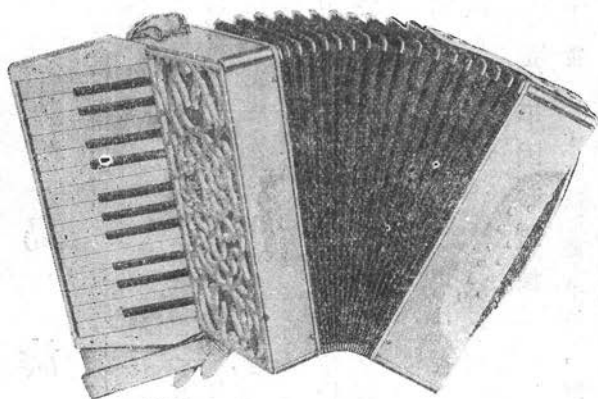
東 魚 私は仙臺淨瑠璃の小座頭が、義經吉野落の件りを、聊か心得てゐるのかと思つてゐた。

省 二 ？

ヤマハ アコーデオン

10號...	¥10.00
20號...	¥17.00
30號...	¥23.00
40號...	¥28.00
50號...	¥40.00
60號...	¥60.00

カタログ送呈



60號 ピアノアコーデオン

山葉ピアノオルガン製造元

日本樂器會社大阪支店

大阪市・西區・四ツ橋南
電話 新町一〇七三番





川柳に現はれた

牛のそまぐ

大島 濤 明

牛の個性と特徴

◇勤勞の牛……牛の特徴は従順にしてよく働くことである。朝まだき星を頂いて出で、夕は茜の雲をよろこんで歸る。言葉一つ通じない人間と只ふたり、鋤を索ぎ、荷を擔ぎ只是れ農人の命のまゝ、素直に働く牛はまことに尊いものである。

働いて何不足なき牛の今日 濤 明

主を信じ牛を信じた牧の朝 同
満月の背中へ當る戻り牛 古川柳

◇牛の鈍重……牛は古來鈍重とされてゐる「くらがりから牛引き出したやう」などゝ、ボカンとした血の巡りの悪い人間を指していふ。

鈍重といふ尊さを牛は持ち 濤 明

牛のそり／＼新芽の草を踏み 三 羊

◇牛の落ちつき……鈍重の一面は落ちつきである。悠揚迫らざる牛の態度は鈍重を通り越しての尊さがある。

躓いた時だけ牛のちと急ぎ 麥 村
荷造りの縄など噛んで牛は待ち 寛 汀

◇力の牛……牛の力と従順は農家になくってはならぬものである。あひ力、あの忍耐から田を耕やし、車を索き農人の營みを助けるのである。

忍耐に牛の力は 培はれ 濤 明
鈍重を装ふて牛の持つ力 同

牛に因む職業

◇牛殺 し……屠殺を業とする者、例令職業とは言へあの大きな動物を刺殺した瞬間の氣持ちは暗いものがあらう

慘虐をちと意識する牛殺し 多 嘉

◇牛 博 勞……牛を賣買する職業である。取引は賣手又は買手とが袖の中に手を入れ、指で値を極めるのが昔からの風習である。

筒袖の中に値がある牛博勞 英 風

牛博勞商取引は袖の中 悠 他

◇牛 醫……獸醫のこと。まさか前脚を出させて脈を見るわけにもゆくまう。

脈を見る所を牛醫考へる 壽々無

◇牛 飼……牛を飼ふ人で、牛方ともいふ。牛飼童などある。牛の背に乗った牧童の笛は昔から詩的とされ、嬉しいものである。

背の笛を聴き惚れて牛遅々とゆく 日 平

◇牛 太 郎……昔吉原の廓の中に働く傭人である。

牛太郎或る日男として不満 濤 明

牛の行事

◇牛 祭……昔山城國廣隆寺にて陰曆九月十二日の夜に行ふ行事で、奇異な服装の僧侶が牛に乗りて堂を巡り、壇に上りて祭文を読むのである。

迷惑なものは祭の牛ばかり 古川 柳

◇牛 裂 き……古昔の極刑の一つ、手足を牛四匹に緊束し、牛に柴を負はせ、火を點じて馳驅せしめ、其の勢によ

りて罪人の身體を四裂にすることで、慘酷極まる刑罰である。

牛裂きへ奉行も少しあつち向き 古 句

◇牛の刻詣り……執念深い女が、嫉ましく思ふ男を詛ひ殺さんと祈願の日數を定め、毎夜牛の刻（午前二時）に頭上に蠟燭を點じ、異様の姿をなし、志す神社に詣り、その人の模形を釘にて神木に打ち附くると、満願の日にはその人は死すといふのである。

執念が焰えて蠟燭溶けかかり 濤 明

人間を離れて牛の刻詣り 靖 人

◇牛 合 せ……牛と牛とを鬪はすのを、古は牛合せといつた。何等の恨みもない相手の牛へ、人間の専恣な遊びに使はれて争鬪を強ひらるゝも牛の柔順さであらう。

牛合せ首をかしげて機をねらひ 東 洋 子

◇牛 か け……昔時陰曆五月五日に大阪北野にて、野飼ひの牛に花を飾りて放ち遊ばした行事である。

飾り牛やはりの氣になつて馳け 濤 明

牛に因む動植物

◇牛 蠅……蠅の一種で、體の大きさ虻に等しく全身黒毛生え、牛の皮下に産卵する。

しつこくも牛蠅牛をつき纏ひ 東 洋 子

◇牛 蟲……あとひざりともいふ。歩行のにぶい所か

らの名であらうか。

あとひざり畑は春の陽があたり 祥兵

◇牛 蛇……蛇の一種で、普通の蛇よりちと大きい。

蛇や蠅を逐ふ役の牛の尾も、人間の手のやうな自由はあるまい。

牛蛇へ牛の尻つぼは及びかね 濤明

◇牛の志た……したびらめの一種

晩酌へいゝ役割の干ひらめ 陽二

◇牛 殺し……バラ科の落葉喬木で山野に自生す。高さは一丈あまり、葉は倒卵形にして尖り、邊緣に細かい鋸齒を有してゐる。五月頃梢に白色で五瓣の小花が傘狀に咲く實は赤い。材質堅く曲げて牛の鼻木に用ゆる。そこで牛殺しの名があるのであらう。

牛殺し牛ながし眼に見て通り 日人

◇牛はこべ……はこべの一種で葉の大きいなるよりいふ。藥草の一種である。

雜草の中ではこべは巾が利き 東洋子

◇牛 酸漿……いぬほづきの一つである。

そのあたり牛酸漿の熟れて秋 英風

◇牛 草……にはやなぎといひ、よく牛の病を癒すといふ。

牛草を牛も知つてゝ少し食ひ 悠他

牛に因む器物

◇牛 車……牛に輓かす屋形車で御所車とも云ふ。交通機關の發達せぬ昔では、貴族の往行は蒔繪などを施した美麗な御所車である。

牛車泥の下地に蒔繪をし 古川柳

◇牛 鋤……農耕用の鋤である。

牛鋤の光れば農家榮えゆく 濤明

◇牛 小屋……牛をつなぐ小屋で、農家では住家の一部に牛小屋を設けたりして牛を大切にする。

牛はもう起きるらしい初日の出 素好

牛小屋を洩れる小唄の麗かさ 六文錢

◇丑 紅……寒中の丑の日に賣る紅、これを買へば縁起極めてよしといふ。

牛紅を買ふて遭ふ日待つばかり 悠他

◇牛 肉……牛の肉、すき焼、牛鍋など人間との交渉は多い。

牛の肉牛が運ぶも哀れなり 素人

すき焼がもう出鱈目な味で煮え 紋太

牛鍋でケチな送別會がすみ 春月

すき焼の入れる役目に甘んじる 水府

顔ばかりほてり牛鍋煮えつまつ 迷亭

(四十一頁へ續く)



土人の酒を造る

西田 艸 樂

皆様が今までかつて見た事も、口にした事もない酒を造つて御覧に入れやうと思ふのです。土人の酒を造つてみやうと思ふのです。

はて土人の酒、あの椰子の木蔭で呑んではテクテク踊るといふドブ酒かいなと御想像になるでせうが、それとも違ひます。

これを口にすれば、アルコール分に陶酔する事は勿論五臓六腑痺れて、全く此の世の苦痛を忘れるといふ魔法めいたものです。

だから皆様が見た事も口にした事も

いや日本人で内地でこれを飲んだ事は恐らくないだらうと思ふ。即ち日本人創始の酒を私は造るべく思ひ浮んでゐる次第なのです。

下戸の私は、いきなり上かん屋へ飛込む勇氣がなく、晩酌に一本つけて貰ふ習慣もないから、それでも少しはアルコール氣がないといけなないだらうと思つて、勝手にいろ／＼のカクテルを考案して、就寝時にグラス、カップを口にすることがありまして、これも大分バーやカフェで呉れるのと違つてゐますが、今度創造しやうと云ふものは、

そんな類とも違ふのです。

北太平洋に沈まんばかりに小さく浮んでゐる小群島に生じるある植物の根に魔酔性の強い成分と澤山な澱粉を含んだものがありまして、私はそのものから、魔酔性の成分を取出して薬品にする事業を極近頃始めたのですが、これに就て外國の書物を調べてゐると、土人がその根から酒を作つて、宗教上の儀禮に用ひたり嗜好したりする事を知つたのです。

その方法は該植物の根を、咀嚼して唾液と共に壺の中に吐き出し、これに

★日本柳壇百人撰★

1936年の金字塔 自選一句 ABC順

豊中市 阿部 閑生

飲みながら 心他にある十二月

地獄など 信ぜぬ男 博突 打つ

静岡市 榎田 珍竹林

東京市 阿部 佐保蘭

酷だった 恩人へ 差す 大廣間

九人目の 子の 瞳にも 親の 顔

京都市 藤本 福造

大阪市 麻生 路郎

一萬圓フンと云つて 草に寝る

東京の 土になる まで 働かう

横濱市 福田 山雨樓

大阪市 麻生 葭乃

晝の風呂いつそあひるで居りましょか

何うあらうともわが子はわが子手も撫け

東京市 古谷 盈光

大阪市 朝田 新水

船頭の色に 落ちつく 冬の 水

お互ひ様が日本の家族主義

東京市 富士野 鞍馬

島根縣 尼 緑之助

村に住めば

母も来て妻も来てぼそく言ふ南瓜苗

ゴム毬へ入れて 空氣は金になり

青森縣 後藤 蝶五郎

水を加へて、醗酵を起さすのです。此の酒をA(ア)といつてゐます。泡盛ぢやありません。

唾液にはエンチームが含まんでゐますから、澱粉がアルコール醗酵を起す事は當然ですが我々の造るものはまさか咀嚼したものを出す譯にいきませんから適當な酵母の御厄介になるより致方ないが、きつと面白い酒が出来ると自信してゐます。

これは私がやらうと思ふ事を廣告すると誤認して載いては困ります。廣告どころか極内證なんです。といふのはそんな事をして酒精税法とかに問はれて、「税務署へ御出頭相成度」なんて事になると事面倒でもあります。それに私は此の酒を造ると言つて苦言を買つたものです。

前申しました様に魔酔性の藥を作る爲めに、技術の方は僕が引受けた、その代り資金の方はそつちでたのむと、或る成功した友人と共同の事業を興す

羨まし何の夢やら子は笑ひ	名古屋市 伊志田 孝三郎	増税の風におのく生命の灯	東京市 井上 信子	酒の座を立てば元日暮れんとす	東京都 今村良之祐	叱られてすむ運のよいあわてもの	仁川府 池田 可宵	瀧壺の泡と親しみ合つた石	博多市 速水眞珠洞	赤松の土地にしたしむ氣で暮し	大阪市 橋本 綠雨	月給のいつから空を忘れたる	京都府 平岩 司郎	もつと甘えろ父さんは酔つてゐるぞ	大阪市 堀口 塊人	鳩杖を母捨て給ふ弘誓の舟	みまかり給ひしたらちねを僣びて	京都府 後藤 千枝
奥さんの嘘別荘は他人が建て	上田市 金子 吞風	雲ばかりうつして山の水たまり	長野縣 金井有爲郎	雨に濡れつつこの肚が出来てゆく	松本市 石曾根民郎	心憎きまでラヂオドラマの會話	西宮市 岩崎 蟬古	久振り酒亂になつた友に逢ひ	東京市 伊藤 瑤天	頬ずりをしたいがすると泣くだらう	山口縣 磯部 孔雀	秋風の饗宴落葉するばかり	横濱市 磯部 天邪鬼	山へ来て驚く鳥も生きている影	今治市 石崎 柳石	兵子帯で明けて二十二女事務	大阪府 石田 沐天	

事になつてゐますが、或る時、私は彼に向つて「君此の物から酒が造れるんだぜ、アルコールに酔つて、五臓六腑が麻痺するといふ、面白い酔ひ方をする酒がね、一つ造つて見やうか」といつた處が、言下に私はやられました。「君は直ぐにそんな道樂氣が出て困る。君位神聖な科學を弄んだり、げんしきな事業を道樂半分にする人間はない。それだから、君は金儲は下手なんだ」とネ。

それでも私は秘密で造つて見る氣が失さらないので、この道樂氣といふ事を一寸釋明して置きたいのです。

そうです私は商用で旅行しても、要らざる名所舊跡を訪ねて廻道をしたり植物の書籍を漁つて、科學としての植物を研究せずに、趣味方面の事ばかり探つてゐる様な事をやつてゐるので、彼がきめつける言葉は正に名言なんです、これは私一人が道樂者でもないでせう。第一私の先生がいけない。

大阪市 片山 雲雀

東京はいつの日縁踏んで病み

青森市 小林 不浪人
屋根雪は度胸を試す 晋で落ち

東京市 植木 鬼佛

黒い子と地聲の妻へわれ歸る

東京市 熊澤 車山
献燈に人の影ある宵の程

東京市 川上 三太郎

子の後姿見倦かず湯吞持つ

東京市 三浦 太郎丸
夢を持つ若さはつしと矢を放ち

東京市 河柳 雨吉

年寄と年寄 久振に選ひ

東京市 村田 周魚
それ／＼の通へ妓の聞き上手

東京市 加波澤 默六

領いてゐて隙のない初對面

松山市 前田 五健
眞中あたり 噴きさうに 櫻咲く

大阪市 木村 半文錢

×月×日、松澤病院窓外の日蝕……etc.

豊中市 森 東魚
川柳忌 獻句
あそびの道の先達に 八右衛門

京都市 紀 二山

嘘を云ふ口を眞ツ正面から見られ

大阪市 森 雞牛子
冷え切つた土管の中の人の夢

大阪市 岸 本水府

第五號 大阪は雪となり

兵庫縣 水谷 鮎美
子をおもふ風すぎゆきてひとりゐる

神戸市 喜多 春秋

總領のその氣になれば馬鹿でなし

東京市 森井 荷十
いつか木になつて風雨ともみ合へる

我が川柳雜誌の社主麻生路郎師がどうです、金儲は上手であるべき筈の高等商業學校を卒業されて、同窓の友人達がそれ／＼大商店主になり大會社の重役になつてゐる時分に、詩人として黙し能はず、川柳向上普及の念禁じ能はずして、「職業川柳人を以て立つ」なんて聲明せらるるといふ事も、先づ最初の起りは學生時代に起つたよく言へば趣味、露骨に言へば道樂氣なんぢやないですか、最も私の場合は師の様に大家になる素質も才能もありませんがね、やつぱり師が師なら見やう見眞似で露骨にいふと道樂氣と言ふやつが、やたらに飛び出したがるのは止むを得ぬ次第です。

いや、これは飛んだ方面へ脱線しましたが兎も角、一九三七年の正月には、私は日本でない屠蘇を酌むかも知れません。

斷つて置きますが、此の酒は心安いからと云つて澤山差上げる譯には参りません。税務署に叱られる程造る譯に

大阪府 村松夢裡
春の夢眠りともない子を寝かし

大阪府 長崎柳秀
洗面器 ホットの方は修理中

高知市 中澤濁水
四十年使った誤字を今気づき

神戸市 西村明珠
人間の淋びしさ働らく氣を起こし

大阪府 西田艸樂
ヤマ三圓 高をくくった段梯子

大阪府 永井芽十
我が齡の父を想へばはづかし

長野縣 中島紫痴郎
眞つ直ぐな水の心が岩を咬む

大阪府 小田夢路
留守に來た孫の噂に酒うまし

大阪府 大石文久
指先に痒さをみせる日本髭

大阪府 小川百雷
小市民的なり家賃比較する

大阪府 小川舟人
饒舌のあとのさびしさ家に着く

東京府 岡本嘘夢
タンクの行進で平和の線をひき

東京府 大村新蟬
無職で居ては困るだらう左様ならとわかれ

大阪府 近江砂人
土筆煮る匂とおもへ風だより

東京府 大野琴莊
借りる判貸す判代書見較べる

京都府 大島黃子朗
たんぼぼをたべる仔牛を仔牛よぶ

京都府 大島無冠王
光は東より家々の門を開け

大連市 大島濤明
饒倅を希ふ心に隙ばかり

ゆかないのと、書物で知る處によるとあまり多量に用ふる時は *Levamisum* と いふ中毒にかかつて、皮膚に癩様の發疹を生ずるといふのですから。正月早

屏風 襖 表装 一式

山守表具店

大阪市住吉區倍野筋三丁目三七番
(電話) 四五〇六番

表装の好期を失はぬやう!

御一報下されば直にお伺ひ

致します

々變な酔ひ方をしてもらつても困るしカワイゾムなんて中毒にでもかかられると。カワイソーですからナ。

東京市 大谷 五花村

天地とは人の住家のある光り

京都市 齋藤 松窓

青空と青春そしてパラソルなど

東京市 齋藤 丹三郎

姿見に偽りの身の小さく見え

石川縣 櫻井 六葉

夜は更けて蜜柑の皮と吸殻と

大阪市 關本 雅幽

退職

丹前の日は美しい街に見え

堺市 志方 蝶二

わが焚いた風呂の溢れるのも休暇

東京市 清水 米花

ひとりを愛す麝香撫子も白

東京市 品川 陣居

冬を越す孤獨ストロブを頼り

東京市 白石 維想樓

抱けばどの子も日本一の子

神戸市 相元 紋太

火を煽ぐ姿暮しに忠實な

大阪市 須崎 豆秋

新緑は木魚の音がするばかり

名古屋市 鈴木 可香

子のあるへ手ぶらで来たをひどく詫び

神戸市 鈴木 九葉

人間の氣持は塩を少しまき

東京市 高木 角戀坊

行く水の唯ころ／＼と笑つて

大阪市 高橋 かほる

一萬圓持つて連絡船に乗り

長野縣 高峰 柳兒

松の内しんみり酔つて卑怯じみ

東京市 高島 玉兎郎

老眼鏡をはづしても子の馴染まない

東京市 高須 啞三味

父の威は子供を叱るのに借られ

色紙 短冊 書畫 表裝 風流 文具

和正堂

大阪市南區心齋橋筋二丁目
大丸一丁目南之辻東入

電話南(75)二七一五番
振替内阪九一七五番

大阪市 竹内機見女
愛の鞭はげしきひとの肩の巾

横濱市 山本斗酒
この友と酌む生甲斐を友も識る

東京市 田中不倒人
子の玩具親父が持つて面白し

大阪市 柳 大門
胴上げにされて額の字顔へくる

青森市 田澤有石
日本に春雨がある妓の素足

東京市 柳 三門
叮嚀なお辭儀胃脚氣故郷へ發ち

東京市 塚越正光
ウインクを返したまふ寄りつかず

東京市 八十島杜若
お題目染みてルムバへのりかくる

八幡市 上野十七八
樂にして欲しいに母の褄がけ

金澤市 安川久流美
ふところへ取りつくせない柿の夢

東京市 山川花戀坊
風の動きの目に見える鳶

名古屋市 吉田水車
どうせ買はせるまでのサービス

京都市 山川紫明
折提げてまだ用のある河原町

★
『日本柳壇百人撰』の出句者にか
なり變遷があつて新進の進出に

東京市 山路星文洞
海岸へ来た予二ア人急に駈け

目覺ましいものがあつた。老大
家の返り咲きもううれしい極みだ

大阪市 山本丹路
うつくしいさかなが二匹そんな戀

つた。今後の活躍を期待する。

御

禮

舊冬、京阪神各支部聯合忘年川柳大會舉行に際し左記の通り過分の御寄贈に預り有難く厚く御禮申上げます。

京阪神各支部聯合幹事一同

▲金一圓、某氏▲金一圓、新水▲金二圓

橋本綠雨▲金三圓、御池橋支部▲金一圓

福田山雨樓▲金一圓、明石柳次▲金二圓

高橋かほる▲金三圓、十三支部▲金三圓

梅田支部▲金一圓、今里支部▲金一圓、

天王寺支部▲タカール二打、大鐵局畔柳社

▲便箋二十冊、鶴町支部▲鐵瓶一、菓子

器セツト付一、新典宗教の暴露百冊、庄

萬よし▲目醒時計一個、神戸支部▲萬年

筆一本、シャープペンシル二本、兵庫支

部▲カフス釦三個、大西八歩▲累卵の遊

び六冊、路郎師▲石鹼十八個、九三會▲

金一圓住田亂耽▲金二圓、西田紳樂▲石

鹼六十個、川柳マツチ二百、御旅支部、

▲風呂敷二枚、シャープペンシル一本、

カナメ▲金二圓、永田里十九、▲ボマー



川柳十徳

福田 三雨 樓

菊池寛氏がかつて大阪で某新聞社主催の女藝講演會で「文學に親しめばこんな得がある」と云ふ意味の演題で語られた事がある。もう十年も前のことであるが、僕もこれを聞いて珍らしい文學觀として未だに記憶してゐる。尤も同氏の話は「文學―主として小説―には文學の使命と意義があるので、これに親しめば得をする」と云つたやうな功利的な考へから文學をやるべきものではないが、實際に得をする點が多い事も考へてゐて貰ひたい」と暗に阪神商工都市々民の文學的關心を喚起することに努められた話だつたと思ふ。菊池氏の説かれた文學の功利觀中には色々の點をあげられたが、僕が今記憶してゐる限りでは世態人情に長け、生きた人間の學問が出来ると云ふことと、自分自身を省察、分解する力と睿智と

が増えると思ふ點であつたやうに思ふ。川柳の場合でもこれと同様の事が考へられるのであつて、川柳を作り、川柳を味はひ、川柳を研究することも、功利的な意味から始めるべきではないが、眞の川柳を知つてゐることに依つて、得をする事は決して少くないのである。

次にその得をする點を十項目許り掲げて見たが、まだこの外にも澤山ある。そんなに得になる川柳なら一つやつて見やうと云ふ様な、奇特な方が一人でも澤山表はれることを、心ある川柳家は待ち構へてゐるのである。そして先づ新年から川柳を初めて貰ふならば、これは所謂百年の計となつて必ずや大成せらるるに相違ない。

(一) ユーモアがわかる

英國あたりではユーモアのわからぬ

男は紳士ではない、と迄云はれてゐるさうだが、ユーモアを解する事は馬鹿話の間からは仲々得られない。腹の中からこみ上げて来るやうなユーモアの味、それは川柳のみが持つ特權だとは云はぬが、川柳も亦預つて力がある。秋風の中で乞食に拜まれる 豆 秋

(二) 人間愛を深める

人類愛と云つてもいい。光つた川柳は必ず人間味が滲み出てゐる。貧しきもの、無智なもの、弱きもの、病めるものを見ても、そこに美と眞實とを見出すのが川柳である。人間が人間を愛する至情の表白こそは川柳の生命である。よき友達の生れることも請合である。

俺に似よれに似るなと手か思ひ 路 郎

(三) 自然に親める

自然を詠ふ短詩には俳句が代表的のものであるが、川柳も亦この如に風馬牛であるものではない。川柳独自の觀察と角度から、自然の風情を探つてゐる。

君 見 給へ 菰蓐草がのびてゐる 路 郎

(四) 觀察が鋭敏になる

「川柳は睨む」と云はれるだけあつて

川柳をやつてゐるうちには、生れつき俊敏でないものでも相當な眼の持主となることが出来る。心の働く素地が作られる。物を見る眼をゆるがせにしない。

大晦日上唇が乾ききり

結美

(五)機智に富む

目から鼻へ抜けるやうな小賢しさは時に嫌味を覚えさすこともあるが、人間機智に富むことは望ましい。川柳の上乗なるものはよくこの機智を働かして、三嘆これ久しうせしめる。川柳をやつてゐれば次第に自分も機智に恵まれてくるのは、不思議と云へば不思議である。

逆とんぼ打つて社長を出迎へる 杏三

(六)心にゆとりが出来る

今日のやうな經濟機構と社會思潮の渦中にあつては、大抵の人はせつちかで、神經質で、理屈ツぽく、愚痴ツぽく、青白くなるばかりである。だまされれると思つて明日からでも川柳を始め見るならば、妙に心の餘裕が出来て昨日と違つた世界を見出し、一服の煙草にも變つた味を求め得るであらう。少くとも釣に行く以上の効果はきつと

ある。

元日だせめて眼鏡を拭きませう

路郎

(七)不平不満が緩和

される

如何に不平のあるときでもちつと心を静め、一句をものして見ると今迄餘りに興奮してゐたことに氣付き、腹の固りが自然に解けて来る。不満が緩和されると云ふよりか、覺りが開けてくると云つた方が當つてゐるかも知れない。

初婚には限らぬさ云ふ年になり 正光

(八)ロマンチストになれる

句を作り、句を詠み且つ味ふことの樂しみ、快よさに慣れるに従つて、川柳作家は知らず／＼文學の母胎であるところの、ロマンチストになつてくる小説を讀んで泣く女のやうに甘くはないにしても、句境と情緒に浸り、感傷を汲むことが出来るであらう。

牡丹雪はら／＼旅にゐる心 葎乃

(九)世間が廣くなる

川柳作家には、職業、年齢、素養、性格、經驗、習性、趣味等々あらゆる種別の、そして廣範圍の階級人を集め

てゐる。川柳の精神がまた集めやうとしてゐる。加之川柳に詠まれる對照が社會百般の人事葛藤に重きをおかれてゐるので、これに親しむことに依つて常に接觸してゐない社會に對する認識が廣まることは勿論、世間の表裏にも觸れることが出来る。

葬式の人夫で食へる道もあり

白蝶

(十)作品が残る

これは極めて當り前の言葉で、五錢で三錢切手を買へば二錢残ると云ふのと同じことのやうであるが、その相違を發見するのには川柳をやるに限る釣銭は使へばすぐなくなるが、文字に残した作品は嫌が應でも後年に残るものである。しかもその作品が光つたものであればあるほど句の永選性があるものである。そして川柳は他の文藝作品に比較して短い詩型であるから手軽に句を残すことが出来る。作品が残るところに文學の尊さがあり、これに拂はるものの悦びがあるのである。黄金を以つて替へ難い心の富とも云へやう。子を死なし學校に手の多いこと 路郎

川 柳 塔

○ 西村明珠

新聞紙孝行者にして死なし
無理してゐる様な顔せず金儲け
日向ぼこ小さな慾がかき消され
字引ひく姿眞面目を失はず
金つかふ方のダンスも疲れたり
相場してゐる顔付を淋しまれ
更生をするに別嬪さんを置き

○ 山本丹路

インク壺手許不如意の主と對し
いそがしいことを悪友信じない
その他の叔父らは粹に出来てゐず
住友はんの税金氣の毒とも思ひ
恙なく疑獄の家の女中さん
牛の様に寝るとは母が形容詞

○ いい戀を母にきかせば母笑ひ
後藤青兒

待たされたうへに電車は試運転
夫婦連親子連なり旗日和
一錢をねだり頭を叩かれる
内職を窓ぎはで見た行樂車
チンドン屋あとは無藝の旗つゞく

○ 橋本綠雨

白粉に悲しみがよく目立つなり
見送りにまた逢へること言ひ添へる

○ 吉田水車

勅題の通りに里の春は明け
空砲へ雀は一寸逃げて置き

○ 西田艸樂

わてかてと女負けずに恥も言ひ



子供の世界

森

東 魚

子供と云ふものは、時に、實に真い事を云ふと思ひますよ。此の間、私は、久々の休みで、甲子園の職業野球の試合を見に行つたのです。セネタースと阪急軍補回戦最後の場面、イヤ、それが最後なる點を誘導した事になつたのですが——盗塁を試みた走者を、一、二壘間に挟んだ場面でした。丁度、三壘にも走者があつて、守備側は、三壘走者に牽制されて、かなり、長追ひする有様になりました。又、走者も實に巧みに逃げたのです——見物は、ハラ／＼しました。其時です、丁度、私の右背後に居た五才位の子供が、突然、かう云つたのです。

「さうやん、何んで、鬼ごせんならんや——とれ。私は思はず失笑しましたよ。嘗て私は、

挾殺は御用々々の氣味がありと詠んだのですが、この「鬼ご

せんならんや」には参りました。天來の聲と云ふのですな——かうした、子供の言葉、言葉そのまゝが川柳ぢやありませんか——ね、ほんとに良いぢやありませんか。

その次の試合になつても、又其の子がヒットを飛ばしましたよ。それほかうなです。あれは、私は元來嫌いなのですが——ほら、よく投手や捕手が、三振の牽制策でせうが、「ヤツたア」と投げるトタンに云ひますね、あれなのです。ツ、エンドツ、五球目と云ふ處です——捕手が「ヤツたア」ミミットを拜みました。

三振さきめたキヤツチの拜みやう

然し、事實はちつともヤツたのではありませんでした——その時、例の背後の子が、
「とうちやん、ナニやつたの、

ナニやつたの」と云つたのですよ——私は又、噴き出してしまひました。

マスクの中で、密かに舌を出したであらう捕手に聞こえたら、さぞ冷汗を流した事でしたらう

それから話は飛びますが、電車内の事です。私の隣に、四才位の男の子を連れた其祖母も見える老人が乗つてゐました。故夜叉郎が詠んだ通り

電車の子おもてを見るがキツイ好き

で、その子も硝子窓へ顔を押付けてるやうにして外を見てゐました。停車の度びに

「此處、何處」

と聞くのです。一々教へて居た老人は、仕舞には、自分の方から、次々の驛を教へ／＼してゐました。

「この次は曾根」
と、老人が云つた時です、その子が、鸚鵡返へしに、かう云つ

たのです——
「虎、居るツ？」

途端に、老人も、隣の私も一所に、噴き出して、朗かな笑ひ聲をあげました。どうも、如何なる聯想が、曾根と虎になつたか

——然し考へてみるに「牛居る」でも、馬でも、象でもシツクリしない。又、場所の名が、寶塚でも、石橋でも、イケない——

曾根と云つて虎さきた處が、どうも、何となく調子がよくつて突飛で堪らなく可笑しがつた。

かう云ふコソは川柳にもあります。辻褄の合はないやうで、どうも動かぬ味ひを誘はれるものが——私は下りる迄思ひ出しては笑ひが止まらなかつたのです。

子の問ひへ笑へば子供不思議さう

漫 画 ヤシキヨシ

脱線正月

漫画 トリオ

小川 武
樋口 ヒロム
北 幹 夫



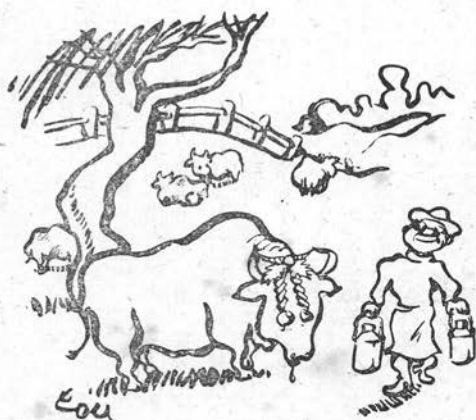
↑ ◆年賀電報

おやち「年賀電報——とはセガレらしいふちい
ハイカラぢやの……ドレ〜オホッ！」



↑ ◆正月は牛に乗って

荷車屋の親方「ごうあつても旦那が牛に乗
る〜つておきんにならないんで……」
妻「道理でおそい筈だわ……」



→ ◆丑年の牧場

「十二年目に一へんのお前の年ぢや
お飾りをしてやつたぞ」

◇オリンピックを飲む

奥さん「三年計畫で元旦から、オリムピック貯金なさるさ云ふのに、飲んちまつて——」
亭主「ア、ユカイ、廻るく走るくまるで世間はオリムピックのやうだわーい」



◇ウシマイ

「ビューヒヤラヒヤラビューヒヤラヒヤ今年は断然うし舞ちや、酔っぱらい」
「オシマイ?」馬鹿云へー今年はまだ始りじやッ!



◇牛祝ひ正月

「村長さアそこのお産だ…牛公一ハえごうだんべえ、おいらモサーいけれえ………」





行 路 集

(1)

長 野 晴 濱

阿 片

暮し向の安定といふ阿片ゆゑ雄心やゝに蝕まれけるか
次々にまた子ら生れ可愛しと愛しほゝけしそれも阿片か
野のけものわれもいつしか月給の住み心地よき檻に馴れつゝ

そ ろ ば ん

わがはぢくそろばんの音のこゝろよく耳にしみ入る淡き哀愁
そろばんよ暫くはやみね相向ひ不思議の縁をかこち交すべく
歳暮なればそろばんの玉もわれからと命あるごと走りたるかな
黙したるそろばんの上にあかあかと灯の落したり深き静けさ



『六厘坊十句』 の再檢討

(五)

木村 半 文 錢

(四) の 續 き)

半文錢附記 前記の諸家の批評で見る如く、劍花坊氏はやはり川柳家として一世の師表たることを肯くに足ると思ふ。實に正邪を寸斷する堂々たる所論だ。劍氏の高説の如く、洵に「平々凡々のことをいつて平々凡々でないのが川柳」の——妙くさも古川柳としての本質だつたのだ。是は、川柳に限らず他の多くの詩歌に於ても同斷である。寧ろ、平々凡々なる境地に沈潜しながら、平々凡々たる詩歌に似て非なるものを詠ひ出すのに多大の苦心が存する。勿論、事實に於て平々凡々に陥つて了へば、それは救ふことのできない實質的平々凡々である。鈴ン坊氏の例句「文明人年中着物を着てござる」の如きものがそれである。亦「帶

解いて着物をぬいで風呂に入り」も同じことで常識を十七字に列べたまでで、平々凡々たるに滲りはない。然し、平凡なる境地に於て、事實非凡なるものを内容的に顯現してゐるのはナカ／＼至難である。この句は事實、平々凡々たる通常の管見に過ぎないが、この句を透して見る作者の意識的悟性——さいふま可なり苦しい言葉だが——に見るべき點が存する。即ち内裏難に對する同情であり、愛である。決して「年中顔を包まれる」は皮相の見ではない。寧ろ、年中顔を包まれてゐる美に對しての愛着であり、執心であるのだ。作者は、それを言外に顯はさずにして斯く平凡卒直に叙したのである。「落人のあさを芒の露が散り」の如き作風をも自家藥籠中に收める才人であ

り作家的手腕を有する人である。この句を色彩豊かに盛り上ることは作家としては何の苦痛もあるまい。然し、それをせずして即ち厚化粧をせずして平淡の裡に妙味を見せつけるところ決して平々凡々ではない。勿論、佳作として推賞するほどの價值はないまでも、さう、攻撃されるほどの悪作ではない。若し此の句が謂ふところの平々凡々であるならば平淡な句は殆ど擧り去られなければならない。適に劍氏は活眼であること信ずる。松窓、角戀坊の兩君が「年中」云々の字句に捕はれて難詰したのは、餘りに理窟的に解釋して却て自縄自縛に陥ちたのではないか。この句に就ては先づ我々は最初に「内裏難」さいふ美しい初五を受けざる。誰しもの感情では斯うした美しい素材を内容とする以上、その上五につゞく言葉が、それに適應するところの表現手法であることを豫想するであらう。然し、この句はそれを裏切つて却て「年中顔を包まれる」と言ふが如き豫期に反した表現法をさる。美に對して寧ろ醜であり得る。明期に對して却つて暗灰色でもあるのだ。そこに我々は瞬間的に不快なものを受け取る。松窓、

武玉川二篇研究を

讀みて

顯 原 退 藏

斯道の先輩三家の蘊蓄を傾けられたこの

研究は、何といつても本誌の誇りにちがひ

ない。後進の蒙を啓くことがいかに多かつたかは絮説の要があるまい。切に三家の加餐を祈るに共に、この研究がいつまでも續くやうにと念じて止まぬ。頃日病閑の間昨年八月號からの分を再讀して、一二氣づいたことを述べて見たいと思ふ。

(四七八) 汁粉の使戸も明ぬ家
鰻汁とでもいふなら二つ返事だが、汁粉といふのでは氣がないといふのであらう。「明ぬ」は「明けぬ」(四八七) よいおとこ悪い男に迷かくれ

東魚氏説が動かぬ所と思ふ。川柳では本夫が醜男、姦夫が好男子と相場がきまつて居る。偶々「ええ男だのに問男氣がつかず」(柳多留十)の如

き場合は美人局である。
(五一二) もとの京から通ふ欄經
朝寝とあれば勿論奈良であるが、この句の場合「もとの京」を奈良と限定するのはどうであらうか。たゞ遷都などがあつた場合、さすがに欄經には佛にも馴染のあるもとの京の坊主がやつて來るといふだけではあるまいか。

(五五二) 大名戻りさびしかる箸
大名戻りといふ言葉はなからうとの説であるが、元祿頃の浮世草子等には折々見える。大名に妾として抱へられた者が、奉公の年期が満ち又はその他の事情で歸つたのをいふらしい。

女房の貌がながめられけり 知足

七厘坊、角戀坊、飴の諸氏は必ずその瞬間的不快から來た難點であらうと信ずる。然し、表面上はさうした不快を受け取るが、けれども、この瞬間は直ぐに後から生起する——と云ふよりは連續して來たるころのもの——即ち、我々が内裏難に對する美感さか又は美意識を豫期した注意力が同時に崩れて弛緩せしめられるものに因つて緩和される。要は、今までも緊張してゐた心的精力から我々自身を解放せしめることが出來得る。「なんだ詰らない」といふ豫期に反した意味の内側に、ある一種の輕やかな快適さを感じる。これが出來得るではあるまいか。——私は、その緊張感から生ずる弛緩性を感じる。私はそれを可笑し味の生理的現象だと見てゐる。だから笑ひの本質と同斷である。劍氏が「三月の節句に一度出ることは出るが、それだけが命で、あたらしい顔を一年中紙に包まれて居るのは氣の毒だとして、可笑味が生じる」と説述されてゐるのは蓋し金的を射た批評眼だと信ずる。その點で、この句は可笑味を含蓄した作であつて決して理窟やいや味の句ではない。六厘坊自身も「何所の點を以て説明にすぎると云ふや」と聞き直つて松窓、七厘坊の兩君に喰つてかかつてゐるのは正當な抗議であらう。「説明に過ぎて面白くない」と言ふのは、自己解釋に即しすぎる結果であつて、その間に生動する滑稽感を味

ものいはぬ大名もどりあて

やかに 竹翁 (元禄六年彼此集)
これなどは大名戻りを妻にした男の得意さであらう。

(六五八) 明星かくるりとふれて淀へ着く
昔は淀の水流の關係で、淀大橋の間の行燈を目當に、舟を必ず逆行せしめたさうである。西鶴の浮世草子その他淀の三十石船の狀を記したものに屢々この事は散見する。煩はしいからその例は省くが、とにかくこの句は舟が逆行する爲、くるりと向きをかへたさまにちがひないと思ふ

(六六〇) 半夏生隣も合ぬ井戸の蓋

延寶刊の「類船集」毒の條に「はんげしやうの日は毒がふるとかやいひならはせり」とあつて、江戸時代では古くからの俗信であつたらしい。

黒川道祐の日記紀事に「今月(五月)半夏生日前夜諸家各屋外掩」井、俗傳今晚自天降「毒氣云」とあるので句意は明かである。なほ滑稽雜誌に

は「半夏生、和俗此日は毒氣降るとて一切野菜を採て食せず、彼「蓋簋にいふ五辛を食せずの謂にや覺束なし云々」とある。

(六七四) 袂て錢を遣ふ墨ぞめ

秋の屋翁の墨染遊廓説が正しいと思ふ。墨染のけちな遊びは、洒落本以前の上方小説に屢々描かれて居る。

(六八〇) 清書は障子に残りた、き鉦

「残り」とあり、「敲鉦」とあるのだから、くはり亡き兒を偲んでの看經と思ふ。

(六八九) 子の扱ひの下手な連歌師

江戸時代の連歌は決して滑稽洒落なものでなく、随つて連歌師に氣さくな人物といふやうな連想はあまりふさはしくない。この句はただ連歌師といふのから、詩人肌で世事にうとい人物を現はしたゞけであらう。

(六九八) 梅に向て齒を鳴らす妻

蕨村の句に「青梅に打鳴らす齒や貝のごと」といふのがある。鳴らすはこの意と同じであらう。

得せぬからであらうと考へる。殊に角戀坊氏は「節句の折には此の覆面を外されると云ふ意味を現はして貰はねば此句は句に成らぬ」と言つたり、鈴手坊氏が「内裏難が年中顔をつゝまれりてゐるは平の凡だ」と誣ひるは洵に其の理由の抽出さるゝところを知らず、私は微笑を禁じ得なかつた。恐らく兩氏共に六厘坊の所説の如く「内裏難は年に一回より顔を出さぬから年中顔をつゝまれる様なものである」と云ふのを誇張して云つたのである」を考へず、常識一點張りて句意を卒讀したのであらうと想像する。若くさうした意味で平々凡々と言ひ得るならば、次の古川柳の如きも亦、同じ範疇に葬り去られなければならない。

鍋いかけすてつべんからたばこにし

落ちて行く二人が二人帯がなし

乳貰ひの袖につゝばる鯨節

これ小判たつた一晚居てくれる

けれども斯うした作品は遠に平凡として葬り去られぬ。されば、劍氏ではないが、「説明に過ぎるさか平々凡々ださかいふて際限が無くなるさ」斯うした句も亦、同じ埒内に追ひ込まねければならぬ。要は、具體的批評ではないからである。抽象的や表皮的な議論で追ひ詰めて行くさ、大抵の作品は平々凡々化してしまひ、然して平々凡々に化しない作品は、得てして不熟生硬な理窟句であることを免れぬと思惟する。



神様と行違つた話

路 郎 生

舊冬は随分と忙しかつたあけても暮れても川柳々々で暮らしてゐて、つく／＼感じた事は、その事に没頭すればするほど、ますますいよ／＼忙しくなるといふことだつた。

從來忙しい中で、川柳の仕事をしてゐた事を思へば、少しはゆとりも出来ることさ、ひそかによるこんでゐたが、さてその仕事に専心携はるゝなるさ、そうはいかない。あれもしたい。これもしたい。あれもしてあげたい。これも

してあげたいと自他の事で矢張り私の時間はみんなつぶれてしまう。

「あんたの性格やから仕方がない」と腹乃にアツサリ、ひやかされるが、この調子では或は脚腰のたたぬやうになるまでは、ムヤミと動きまはるのかも知れない。

實は僕は今年に五十になるので、五十になつたら、少しく落ちついて「川・雜」の仕事はすべて誰かに譲つて僕自身は川柳の象牙の塔に閉ぢこもつて、思ふがまゝに書いてゐる讀んだりしたいと思つてゐる。

だが、それも昨年の改組からどうにも手をひく譯に行かず私の考へてゐた事は當分實現しきうにもない。しかし何れにしても川柳のために働くことにかはりはないので、もう一度フンドシを締め直して大いにやつて見たいと思つてゐる。

私の元氣はこの年になつてもなか／＼落ちない。むしろ、より以上に旺んであると云ひたいが、肉體の方はさうはいかぬ。それでひそかに警戒はしてゐたが、暮の二十四日だつたか、玉出の街路上にこれといふ原因もないのに、木を切り倒したやうに物の美事にブツ付れた。

それがために、その夜の堂ビルの忘年會は、出席を

約してはあつたが失禮したしかし、尼ヶ崎の親友會の忘年川柳會は責任上出掛けすることにしたが、これは家族が案じるので、機見女の護衛つきで出掛け辛ふじて責をふさいだ。

私は今でも、なぜ付れたかその原因を知らない。矢張りもう元氣だけではいかぬ年になつたのだらうか。さう考へると、私が柳界のために働いて置きたいと思つてゐる仕事は、いよ／＼以ていそがねばならない。

私の家族が、私の付れたことについて、非常な衝撃を受けたのも無理はない。私の父も大阪の北區の大火のあつた直後、九月に腦溢血で亡くなつたし、葎乃の

◇牛

若 牛のつく人では先づ牛若に指を折らねばなら

牛に因む人名

牛乳屋それからそれと春を告げ
牛乳屋戻りと見える箱の音
牛乳配り義侠の人に見つけられ

文 象
牛 歩
英 風

◇牛

乳 滋養の多い飲料で、牛乳配達の哀話などあつて、川柳も相當に多いのである。

(二二頁の續き)

父の蘆村翁も矢張り笠置でもんどり打つてブツ仆れて二年後、矢張り腦溢血で亡くなつたといふ前例がある殊に健康そのものだつた葭乃が、昨年の七月に突然仆れて病臥三ヶ月、まだ充分に健康體にはなつてゐない時であるが、萬一のことがあつたといふ考へ方がこどもたちの頭にまで浮んだらしい。

× ×

葭乃が私の仕事場へ出て來ての話に、「澤田先生がお茶を喫みに來やはつたので、あなたの仆れた話をしたら『そんなことはよくありますな。田舎では、神様と行き違ふのだと云ひます』と云やはんネ。先生はお醫者はんやからそら血壓でも計つて置けと云やはるかと思つてたら、まるで見當違ひの返事をしやはつたので、矢張り先生

はあなたが、川柳々々で暮らしてるやうに、民俗學の事ばかり考へてはるのやなア」といふ。

「アハ、そいつは面白い。それでエ、のや。澤田博士は民俗學で生きるやうに生れてゐるのや。エスペラントのザメンホフ博士も元は齒醫者だつたが、寝ても覺めてもエスペラントで門前雀羅だつたといふことだし、そんな例は古今東西

にある事だ。僕だつて、親爺は商賣人にするつもりで高商にまで入れて呉れたが矢張り川柳家の方が板についたのか、遂々自分で川柳業をはじめてしまつたやないか。人間の仕事は何處に待ち伏せてゐるのか判つたものではない。まあ、さう心配するな。それよりも暮の忙しいのに神様と行き逢うた方がよつぽど面白いやないか。

ぬ。幼時の牛若、長じて義經、源平の戦に至る間牛若の一生は波瀾萬文である。

牛若はどこへ行くにも足駄がけ 古川柳

◇丑五郎 馬喰ひの丑五郎といへば、義士傳の神崎與五郎東下りの一節に現はれ聽衆をうならせる。

丑五郎讀んで貰つて酔ひがさめ 菊之助

◇樗牛 明治初年の文學博士に高山樗牛といふ有名な學者があり、その他にもまだ牛に關した名前ものも多々あることと思ふが、この邊で措筆する。



川柳新年

生方敏郎

屠蘇

其角の句に「十五より酒を飲み出て今日の月」と云ふのがあるが、若し正月の屠蘇をも酒と云ふならば——そして其れは眞に酒に違ひない——私は六歳から酒を飲みはじめたと記憶する。自分の正確な記憶が六歳の春だから或はもつと以前から酒の味を解したかも知れない。

父は酒飲みで、酒飲むことを楽しみ酒豪と云はれることを悦んでゐた。そして

「敏郎、酒を飲め、酒を飲む奴は、俺の子だ」と云つて、我々子供にも飲酒

を奨励した。

そして、父の遺傳か私も酒が好きで酒を楽しむ。併し奨励されたからとて決して酒豪に成るものではなく、三杯四杯、飲むこと少量にして早や陶然とすれば、私はそれで大満足する。決して酒を貪らうとせぬ。元より禁じられた酒でなく、自由に飲まされた酒だから、飲みたいだけ飲めば止む。強いられたとて過ぐす酒ではない。

正月は私も亦た自分の子供たちと三ヶ日の朝屠蘇を飲む。誰も皆三盃づつ冷たい屠蘇の味は、木盃が最もいい。又金銀の杯もいい。

賀 状

元日は何うも和かで、家にゐて炬燵にあたりながら、配達された年賀状に目を通して、友人たちを思ふのもいい氣持だ。住所の變つたものもある。歌や句を詠んだものもある。珍奇な意匠をこらしたのものもある。皆とり／＼に面白い中には大に宣傳を兼ねたものもある。それも宜し。

何事があつても腹の立たぬのが、元日氣分だ。

神 詣 て

舊市内に住んだ頃は、私はいつも子供を連れて、元旦には靖國神社に詣でた。西郊へ越して來てからは、明治神宮へお詣りする。一年大阪で正月を暮した時は、二十一日に大師廻りをした夜をこめて早曉各寺の大師さまに參詣した。あれは何とも云へぬいい氣分だつた。

寺々到大師さまの像があり、幾體も並べたところもあり、大師さまの足りないところでは、役の行者の石像が置いてあつた。前鬼後鬼もあつた。私はそれへも一々お米を上げて參詣した。何れも皆大師さまと思つて氣持よくお米を上げた。

追 羽 子

之はおひはごだの、おひばねだのと云ふ人もあるが、訛つておよばねと云つた。

およばねから
おひばねまで
縁は異なもの
取らうぢやないか
あじなもの

と云ふ字餘り都々逸がある。昔の正月氣分をよく寫し出してゐると思ふ。七歳にして男女席を同じうせずと、野暮といはうか嚴格といはうか、何しろさう云つた時代に、お正月ばかりは女の子と一所になつて、羽根もつけばまりもつき、積將戲、受將戲、すごろくもやれば歌留多も出来た。開放された氣分のお正月は、今に忘れることの出来ぬ楽しい追憶だ。

初 買 ひ

一月二日、今の人は初うりと云ひ、商店本位になつたが、私の子供の時分には客本位に此日を初買ひと云つた。私の家は田舎町の商店だが、それでも私達は初買ひとばかり云つた。

商家では元日の夜は全く徹夜で、翌朝の客を待つ。早い客は十二時過ぎると間も無く来る。早く来た客は奥へ通して雑煮を振舞ふ。遠い村々からその時間にやつて来る。二時三時と次第

客足が繁く成つて、拂曉の頃には店も口も利けぬ程忙しい。

併し、商家では一方商ひをしなながら暇を見て、他の商店へ買物に行く。まだ暗く來客の立て込んで来ない中に出かけるのだ。

此日には何處でも景物——景品を出す。それも買物をする楽しみの一つであつた。日清戦争頃から、東京の方から賣出しと云ふことが流行つて来て、何の店でも「賣出し」と白く抜いた赤い旗をかかげるやうに成つた。

東京は近年、大正の初め頃から益々歳暮の賣出しが盛んになり、殊に大晦夜は寝る目も寝ずに活動するので、元日は全く火の消えたやうだ。和やかに相違ないが、商店で元日から戸閉めをしてゐるのは、あんまり讚めた風景ではない。

元日の晩には、百人一首をとる聲の戸外に洩れる家もあるが、一たいにひつそりかんとして、何處でも早く寝る。従つて二日の初買ひも殆んど振はない。元日の晩あんなに眠くては、初夢を見る餘裕もあるまい。

大 晦 日

併し、大晦日の夜は景氣がいい。街

は到るところ賑かだ。暗い裏町でも絶えず人が通り、提灯をつけた自轉車が走つてゐる。ラヂオでは除夜の鐘を放送する。枚島瑞嚴寺の鐘を聞いたかと思へば、越前永平寺の鐘を聞き、京都相國寺の鐘。果ては九州から朝鮮の寺々の鐘までも放送する。

ラヂオの前に集つて、あの鐘をぢつと聴いてゐる家庭風景。

新宿や銀座あたりへ押し出せば、街は悉く人の波で、歩くよりは押されて行くのだ。東京の大晦日は今やお祭氣分に成つてしまつた。

借金と言譯に苦しんだのは昔の大晦日、今はレコードの小唄に浮かれ、カクテルの味に酔ふ大晦日となつた。

ク リ ス マ ス

之も新時代の風景だ。即ち年末のボinas氣分が作り出した歳末のお祭だ。ボinasを受けるサラリーマンが無かつたら、街のクリスマスは全滅だらう。教會のクリスマスは、子供の爲のクリスマス、街頭の——カフェー、ダンスマンの爲のクリスマスは若いサラリーマンの爲のクリスマスだ。明治大正の青年は年末の間の楽しみだ。昭和の青年は正月の年末の間の楽しみだ。ボinasの德にある間の正月だ。

謹で昭和十二年の新春を
賀し併而川柳人協會員諸
氏の柳運長久を祈り奉る

丁丑元旦

川柳人協會

謹・賀・新・春

大島 濤 明

大連市西公園町川柳居平洞
電話 自宅 三七一三番

中島 紫痴郎

信州湯田中温泉

村田 周 魚

東京市豊島區高田本町
二ノ一四六七番地

頁★の★協★川



川協名譽會員、岸本水府氏の主宰する番傘川柳社では廿五周年記念事業として一月十日「全國川柳大會」を大阪市中之島中央公會堂で開催されます（會費參圓）翌十一日は「大阪市内觀光」（會費貳圓）と「全國川柳家座談會（會費五十錢）」が舉行されます。（詳細は「番傘」並びに「川・雜」十二月號柳界展望欄を參照）歴史ある「番傘」誌のため地方柳友の來援をお勧めいたします。



オール名古屋川柳團主催、岐阜川柳こがね吟社賛助の下に第四會全國川柳家交驛大會が四月十八日（第三日曜）に名古屋市中で開催されることになりました。三月十五日から五月末日まで汎太平洋博覽會が同市で開催されるので、その會期

中を利用して舉行されることになつたので、博覽會見物を兼ね全國柳人の擧つて參加されることを切望します。會費は金拾圓（名古屋迄の往復旅費を含まず）申込期日三月三十日迄とし申込みと同時に豫約準備金として金貳圓を事務所宛送金のこと、詳細は名古屋市中區八百屋町三丁目二一犬窪文芳氏方オール名古屋川柳團歡迎事務所へ問合はされたい。



昭和十一年十二月十九日の東京日日新聞紙上に「川柳博士死前の愛」といふ見出しで、川協・名譽會員であつた故岡田三面子博士の人間味が掲載された。
記事内容は未亡人岡田はなさん入籍に關するもの、詳細は同紙のを參照されたい。

岸 本 水 府

大阪市北區堂島北町一六

榎 田 珍 竹 林

靜岡市寺町四丁目

蛭 子 省 二

朝鮮光州府本町四

森 東 魚

豊中市櫻塚一一〇六

川・協・問・答

(1)問——私は「川・協」の繼續讀者ですから、當然川・協の正會員だと思ひますが、そうではないのですか。

▲無いとすれば手續はどうすればいいのですか。

答——「川・協」は川柳雜誌社が刊行してゐる超黨派的な柳誌であり川柳人協會はオール川柳人（海外までを含む）の交驛と同時に川柳を向上發展せしめるための機關です。そして従つて、「川・協」の繼續購讀者であつても、「川・協」へは新に正會員の申込みをされな以上、「川協」の會員にはなれません。

▼「川・協」入會の手續は至つて簡單です。貴下の住所、氏名、雅號職業等を記載した川・協會員申込書に半ヶ年分の會費金壹圓六拾錢又は一ヶ年分金參圓を添えて川・協の事務所（大阪市西成區玉出本通三丁目川柳人協會振替大阪三一五一四）へ申込まれたならば會員章が届けられます。

▲「川・協」の繼續讀者で即刻入會を希望される方は右の申込書と同時に新に會納費を納入しなければなりません。若し誌代に殘額があれば殘存誌代の月數だけ加算して即時正會員章を發行することになつてゐます。

阪井久良伎

市川市眞間八六

前田五健

松山市眞砂町二一

藤本福造

京・姉・麩

池田可宵

仁川府宮町

中澤濁水

高知市本與力町

塚越正光

東京市芝區田町九ノ一三

小林不浪人

青森市浦町橋本二八三



てもおラウの旗國

を き あ ・ を か た

この國の國旗でも裏表があるもの、外國のそれはよく見分けがつくが、日本の白地に赤い「日の丸」は左右も裏表も判然しないから一寸困るやうである。日本人全體がまだ國旗に對する感念が他の國人のやうに明かでないのは遺憾千萬、萬國に比類ない國柄だけに一層、國旗に關する智識を一般化するに正しき諸儀禮をも定めておきたいものだ。

七八年前、今は市になつた豊中の克明小學校で正月元日の拜賀式の時、Kさいふ一學務員が澤山な生徒の集つてゐる席上で、國旗掲揚の方式に就て校長に面罵した事があつた、その學務員のいふのには——二本の國旗を出す時はいつも交叉す

べきものである、それにこの學校の門には左右に二本たゞ差し樹てゐるのは、どうした事だ、教育者さもあるう者がそれほどの心得がなくて勤まるかと。ところがその時の校長も國旗に關する正しい智識がないものだから、その時は無念を耐へて黙してゐたが、あまりといへば自分の教へ兒らの面前で耻をかくされ、殘念でたまらず、すぐ大阪府廳にかけつけ學務課に相談に及んだが、そこでも明確なことは判らず、悶々に暮してゐたところ、この事情を聞き知つたわたしら同志のものが作つた國旗宣揚會なるものが、國旗は交叉する方が却て通り（國際の場合に別として）で校長のやり方が寧ろ正しいのだ、然し間違つたからさて、これを罪にする法律は作られない、これは明治大帝の有難いお思召しによるものと宣明してやつたので、校長は大よみこび、半可通なその學務員は平あやまりに陳謝し自らその職をも辭したさいふ。これらはどちら

國旗に關する智識が足りなかつたから起つた事件である。

さて國旗のウラおもてを定めるのは、つまりこちらから向つて左の方に棹があり、その左から右の方へ横にいろのが本體なのである。（詳しい割出の寸方もあるが略す）ところが、この正しい方式から見ると、あの朝日新聞の社旗になつてゐる六本の光線を放つ日の丸に「朝」の字を現はしてあるのが全く旗のウラおもてを理解しない時代の產物で、まさに不都合千萬だと、私はその社に在職中度々忠告したのだけれど、どうしても改めようとはしない、妙に頑固な社だ。

ある人が曰く——甲子園に、あの野球大會が續く限り社旗の違法は改めないヨ、何故なら甲子園の夏は大概西風が多い、萬一改めたが最後、外野から各スタンドの屋上に樹てた社旗は右から左へ流れて「朝」の字が悉く裏返しになつて頗る縁喜が好くないからサ——さ。



一路集

募集句

十八九

前田五健選

純情の瞳が美しい十八九
十八九他人目うる事を知り
十八九父に智恵かる事が出来
夢の様な戀を戀する十八九
親父より五寸は高い十八九
十八九行儀を母に叱られて
生活の事とは別な十八九
あゝしんど十八九の素足見せ
朝食はパンにして見る十八九
叱られる姿も娘十八九
御用聞きあつさり去る十八九
十八九吸取紙が吸ふた戀

靜路 キミ女 岩石 朔風 双亭 春秋 青兒 菊人 七步 盤根 斗風 曉童

ハンカチを疊んで見る十八九
自轉車が一臺欲しい十八九
十八九うっかりかゝる偽刑事
恐るべき十八九なりけり
十八九市電の隅で外を向き
十八九云へぬ疑問に投書する
米を研ぐ手に思案あり十八九
十八九父の動悸に枉げられる
十八九テリヤを抱いた丸い膝

精銳吟

新水 其奥 同 榮 正穰 柳石 久米雄 木履 同 兄兄 文庫

富士を描くに三十六景もあれば百景もある
「十八九」の覬ひ方纏め方に「譯なき笑
ひ」「縁談」「羞耻」「化粧成熟」「戀心」「空
想」「監視の眼」等々カメラの向け方シボリ
方に理智、深愛、慈悲、實踐、理解、刺戟
重心、缺點、明快等々夫々の趣のあつた事
は勿論私の鞭韃にも成つたが諸氏が鍛鍊上
ウツカリ出来ぬのをハツキリ示してゐる、
相當澤山あつた著が轉んでも笑ふ十八九的
の觀點は再考鍛鍊お互に跳躍して隔遠の昔
の事にしたいものである。不斷の用意をつ
くぐさ感ぜしよ、餘滴を爲す(健)

餘滴

十八九或日生花切過ぎる 徒歩
啄木に共鳴出来て十八九 芳町
眞つ直と行く氣の強い十八九 春秋
ジレットの替刃がたる十八九 葉光
人位
縋帶をしてゐるもよし十八九 水客
地位
天才の死に頃となる十八九 葉光
天位
十八九希望を崩す母とゐる 柳笑



川柳隨想

山 本 丹 路

冬が這ひ寄ってくる。かうして冬の陽が明るく障子に射す座敷で、二三日來の風邪氣味の身體を机に寄せてゐると、ながいあひだ取り逃がしてゐた様な氣がする落着いた氣分がしつとり身體に充滿し、そこらあたり、床の間の菊も、火鉢も、筆筒も、壁にかかつた師の色紙も、みな調和した思ひやり深いところで、私を抱擁してくれる。

顔である。死んだ人、外國へ行つてしまつた人、身近くに居りながら久しく御無沙汰してゐる人、しばらく句を發表しないと親切な手紙をくれる人……うつすらと眼をあける。冬の陽が雲に入つて、手許が仄暗い。やがて明るくなる。昨夜來の風雨が上つた後なので、雲の往來がはげしく、陽がさしたりかげつたりするのだ。いぶしのかかつた様な冬の青空にかかる灰色の雲もまた落着いた氣分を與へてくれる。

昭和十二年——新しい年を迎へて、平凡な感懷ながら先づせつせと句を生むこと。我がかなしみ、よろこび、淋しさ、等々をそのままに過ぎてしまはず、いとしみなつかしみ句にしておくこと。川柳の樂しみ茲に盡きるのではないか。理論も批判も大切だが、まづ川柳の樂しみを知らねば、それにはせつせと句を生むこと。實作に年期を入れること。十年先、廿年先卅年先、漸く一家を立てることを目的に、川柳の樂しみを追ふことだ。批判力も理論も自から身につけてく

就て、横光利一の季肯定や俳句精神の意味等、私は興味深く同意した。室生犀星がその句集を俳句集と名付けず發句集とした氣持も現在の雖然とした俳壇に對する反動かも知れぬし、或は一切を超越した枯淡な氣持からかも知れない。その氣持の何れにしろ私は奥床しくその人を思ふ。川柳の方にも、いろんな論争題目が實作上にある。それに眼をつぶるわけではないが、どの方向に流れようと、所詮人の性格によるのであらう。たゞその流れを徒らに本道呼ばはりせず本道たらしむあらゆる精進努力を惜しまることが肝要なのであらう。わが川柳道を厳しく反省するとき、冬の陽は鋭く我が心を射る。我が心、我が思ひ、そのあり様によつて、陽も雲も風も水も、夫々の姿見をせるのであらう。



町・横・柳・川

鳥 死 不

路郎が新年號の編輯に夢中になつてゐる
さ、三男のボーが横から「お父さん」「ワ
△」「川柳雜誌附録あるのん」路郎グツと詰
つて「幼年クラブ」さ違う〜。

「一九三七年の柳界から南北の名を消し
たい」との御詫言である。赤前垂れで留め
に出る人ありやなしや。

所名本日 柳川物名

(巻の都京)

選明紫川山
畫鱗大賀朝

(六) 東 山

東山 眠る頃から三味が洩れ
東山 見つめる二人の眼が綺麗
東山 兵隊さんの戀を知り
東山 鐘は所を得た響
東山 だらりの帯のツマになり
吉兆 水客 陽出男 雨城



幕の財布

失禮な事を致してお訊き致しました。元より無事越年の方々
(編輯局)



☆

大阪 須崎 豆秋

金は五十銭が六枚さ、十銭五錢一錢取交
ぜ三十八銭。外に、チヨツキのボタンさ成
田不動明王のお守札。このお守札こそは私
の禁酒を看まもり給へさ今春妻がわざ／＼
おうけて來し靈敏あらたかなるお守札の
由、その後一向禁酒せし覺へ無けれど目も
つぶれず。

☆

東京 品川 陣居

(十二月十三日朝)一、現金一圓八十八銭
也内譯五十錢玉三個十錢白銅三個一錢銅貨
八個一、特別所得税領收證書(金一圓四十
四錢) 税制改革の前觸れお手並として小生
にまで納税通告あり欣然として國民の義務
を果したるもの。一、淺草寺めぐじ「第五
十一吉」一、金剛山(川崎大師) 災厄除御守
一、上野清水堂厄難消御守一、西新井弘法
大師厄除守一、芝白金清正公勝守(以上の
お札類は四十二の厄年を無恙過ごさせ給へ
と諸神佛に祈願したるもの)

☆

大阪 橋本 綠雨

十圓札二枚、五圓札一枚、五十錢銀貨六
枚、十錢白銅貨四枚、五錢白銅貨一枚、一
錢銅貨一枚、計二八圓四六錢水晶、認印一
個、市電襟章二個(但し損じて居るので交
換すべく入れ置く)振替送金受領票(一四六
〇圓) 田地買収玉返稅務署宛「書留 通常」
受領票(所得稅申告に使用したもの) 大丸
買上受取傳票(六〇圓)一枚名刺一枚橋本綠
雨副比叡山根本中堂藥師如來御守外〇〇一
枚(十三日朝)

☆

金澤 安川 久流美

ハガキ受取つたのは十一年十二月十三日
午前九時半頃早速ガマ口の中を開いたら五
十錢銀貨一枚(大正十五年造)と十錢白銅貨
四枚(大正十一年三枚昭和三年一枚)都合
九十錢一尤も一寸前迄五圓の紙幣はあつ
たのですが、納るとこへ納まつたアト、其

他左の新聞切キが一枚、之は想像にまか
せます。

事務員 募集

十八九歳より二十二歳迄中等學校卒業
程度の方履歴書持参本人來談あれ

驛前 ××合同運送株式會社

☆

青森 小林 不浪人

僕の墓口は謎ひつぷしのいさもイキナシ
ロ物であるが、お腹を痛める持病があるの
である。けれども、此の日に限つて、幸福
なる過剰と云はうか、頗るこまではいかな
いが、健在そのものである。

先づ十圓紙幣が一枚、お次ぎは五圓紙幣
が二枚その次ぎは五十錢銀貨が七枚、それ
にコマカイさころでは十錢白銅四枚、五錢
白銅三枚、一錢銅貨二枚ざつとこんなもの
である其他、市營バス割引券三枚三錢切手
五枚、二錢切手三枚三錢收入印紙四枚、そ
れに「サムハラ」と書いた小判真鍮一枚それ
から某カフエーの勘定書一枚である。



春・閑・雑・筆 吉田水車

牛車の牛がつかれて休息中、犬がやつて来て電信棒と間違えてシャットばかりに失禮に及んだ。牛公はさ見るミデロツミ流し目でにらんだだけで何を小作めと言っただかたちである。尤も鼻柱かつながれてゐるのだからどうにもならなかつたであらうが、この寛容の態度はさかるとんがらがりがる人間社会へのよき

いましめである。

魚網を助けるために二千尾ばかりの鰯を犠牲にしたと云ふ記事が新聞にあつた。犠牲にしたと言ふのは人間からの場合で鰯から見れば命拾ひをした譯である。立

場合がかわるゝ斯ふも違ふのだから立場ごころが目色毛色の變つた同志の世界に永久平和の來そうな筈がないと言ふもの大阪朝日新聞學藝欄に歌碑集が連載されてゐた。恰度故劍花坊師の句碑と解説が載つた其臨の文苑に短歌協會が愈々生れることを報じてあつた。一と足お先きへ川柳人協會が誕生してゐるんだからおもしろい(短歌の方にも舊協會があるにはあつたらしいが)主腦部の顔ぶれも現短歌界の一流の人々であるのは言ふ迄もない、何のつながりもないにしても劍師の句碑(咳一つ聞こえぬ中を天皇旗)紹介と同じ欄にこれを報じてあつたことは奇縁さでも言ふのであらふ。東京には愈々文藝協會の會館建築も決定されたし、川協の所期の目的達成に甚大の支援と關心さが注がれるのも當然である。

街に住めば

高橋かほる

一日の旅でも梅田や淡町につくさ實に涙のこぼれる程嬉しい。冬は殊更そう思ひなあれへんか……

即席御料理

天婦羅・ちり鍋

二階に靜かな座敷も御座ります御利用下さいませ……

河豚だ

酒だ

男盛りの

うれしけれ

路 郎

ま ん 朝

大阪千日前芦邊劇場東裏

電話戎一五三一番



川 柳 年 忘 れ 大 會

川・雜京阪神各支部聯合主催

珍らしく暖かい師走十三日夕道頓堀俱樂部に於て待ちにまかれた忘年川柳大會の幕は切つて落された。壇上には優勝盃が燦として輝き、壁には各支部並に一般よりの寄贈品目錄が掲げられてある。受付では第二回目の川柳の特典として會費の割引あり、目まぐるしく殺到して来る參會者を悠々追らず、懃懃に迎へる夢裡君。遅ればせに賞品も持込む幹事のあわただしい姿。舞臺の上では賞品の指揮に鮮やかな手並を見せる里十九君。勇敢に顔を見せた數名の女流作家、錦上華を添へるの感あり。

セイカイランシユクス リユウジ
ヨロコビトキボウガ

ヒカルトシラスレ 五ケン

京都の柳次君、松山の五健君からの祝電が讀上げられる。青兒君の司會、新水君の開會の辭あり。場内は作句の増進に化す。萬よし君の講演「政界ユーモア」について披露。路郎師の講演「川柳人打診」は、ユーモアの中に參會者をうなづかし

めるに足るものがあつた。記念撮影後最高點者不角君の手に優勝盃は歸した。かくして一九三六年掉尾の大會は神樂君の開會の辭によつて明朗裡に散會した。尙兼題路郎師選「髭」の句のみ掲げてあさは次競に刺愛した。(飛見女記)

出席者芳名(出席順)

路郎師、葭乃女、アト、綠雨、美奈子、靜江、豆秋、鮎美、新水、つさ夢、夢裡柳笑、かほる、世間音、明珠、破鼓、青兒、水客、紫香、徳三、星水、双葉子、蝶の助、南瀧路、天國、變人、ライト、よし美、千雨、小柳子、胤盈、木賊、某人澄風、秋生、靖弘、緩勾配、吞々子、蒼水、佐太郎、一八、朴堂、不凡、夜王、凡路、十九緒、鐵心、清利、閑路歌、都路、覽定、シナ、禮人、秋夢草、翠泉、美奈都、靜波、朔風、斗風、黃步、翠陽、案山子、靜路、悟郎、彩泡、方眠、節子、八步、貫、みつる、默平、靜城、鉛位、葉平、雨少、雄謙、一峰、美知夫、樂天子、舟哉、桂三、落丁、形水、雨亭

三狼子、亞鈍、沐天、十字路、艸樂、巨雷、遠見路、幸捐、其奥、いわを、繁一、一生、勝太郎、春秋、日葉子、テルホ、鯉、玉政、菊人、よと江、源坊、蟻朗、翔我、羊ノ介、不角、溪花坊、白峯、岩石水染、亂耽、翠夢、ツヤ子、萬よし、正明、夕鐘、小柳子、多郎、道樂、機見、女里十九、尖里、一服、鵲峰等の諸君

兼題「髭」

麻生路郎師選

老境を悔ひなき人の銀の髭 某人士
口髭に粕汁のあさある沖仲仕 斗士
十銭の手相を觀るに髭があり シナ子
年末へ髭の手入れがあるばかり 水車
妹に髭撫でられてちさ叱り 菊人
將軍の髭ののもし、雪の原 明珠
恩給にたるさみしき髭となり 遊歩
大空を鏡に入れて 髭を剃り 秋無草



支店長髭に白髪のおつてよし 普天
財産も髭も二代目うらやまれ 樂天子
忘年会 髭髭髭が並ぶなり 案山子
落目から生へるがまの髭となり 彩泡
頼持ちの方が立派な髭を持ち 靜路
應接に髭ひれつて暇もなし 綠雨
腰辨とあなごらぬ髭を撫で 夢裡
インチキに似合はぬ髭を持合せ いわな
髭かいてせめては子等か喜ばす テルホ
國情の遠ふ動亂ごぜう髭 破鼓
將軍の髭へ零下三十度 雙葉子
零落の髭かたくなを増す許り 水客
世の中をあざむく髭さなりにけり 靜波
酒臭いこの髭さんなて持餘し 新水
髭剃つて 今日のを髭はす 緩勾配
留守番の片髭をつた顔を出し 十七夜月
頼もしい髭と女給に引つづられ よし美
妻の前妻に秘密の髭を剃り 小柳子
髭おいてゐても家賃け滞り 亂耽
鼻の下人間さいふ毛を残し 不角
益さんの髭でしばらく子は遊び 變人
返事するかはりに髭をなで廻し 柳笑
昇給の記念に髭を立てて見る 水載
大阪へ髭を伸ばして舞ひ戻り 聞路
その髭へうつかり女賣られかけ 同堂
髭落しかれてタバコを賣るくらし 朴堂
着流しの巡査の髭は親しまれ 徳三
貧しさを見すかされてる髭の夷 同
髭をいてからのくらしに無駄がふえ 佐太郎
真い髭さ云はれ屑屋が嫌になり 佐太郎

支那人を使ふ口髭うすきで 同
口髭へ母は出世をしたさ決め 同
十 秀
人生はそんなものだ髭を抜き 一
インフレの世に出る髭となりけり 蜂
髭剃つたあさ寒々さ失業者 翠陽
髭のある方がおごつて貰ふなり 豆秋
此の職に忠實ならんさして髭 靜城
せめてもの毛生薬にたよる髭 美知夫
髭を剃りながらガス代延すなり 木賊
買収へ心動かぬ髭があり 岩石
大梅日髭落しても同じ事 悟郎
逆剃をして自惚を感じる日 歌津路
五 客
マスクからはみ出して居る髭白し十字路
パートナリ十日疾の髭をつけ 豆秋
飲むか嘔むのか盃は髭の中 沐天
君それが髭かそのぞきこまれたる 亂耽
手内職髭の手前もはげからず 新水
(人)日給を嘲ける如く髭が伸び 不角
(地)非常時をさげふ佐官に髭がなし靖弘
(天)男さといふものゝ明治の髭に見る不角
支部幹事並に關係者記念撮影(前列右
ヨリ)里十九 櫻見女 アート、靜江
美奈子、悟郎、背兒、(中列右ヨリ)鮎
美、路郎師、霞乃女、綠雨、艸樂、新
水、夕鐘、(後列右ヨリ)夢裡、白峰、豆
秋、亂耽、いわを、かほる、明珠、春秋

各地柳壇

いのちある句を創れ

規 清 投 稿

- 一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
- 二、文字正確明瞭に記載のこと
- 三、開催月日及場所記入のこと
- 四、締切は毎月廿五日とす
- 五、投稿先は本社宛

川柳 雜誌社 鶴町句會 (大阪)

十月十七日

於加藤ライト居

宮岡白峯報

宿替、夜店、火鉢、穴、盲人、電報
 タクシーに積んで引越す一人者 千 兩
 宿替の何處へしもたか見當らず ライト
 祝まで持つて宿替来てくれる 同
 宿替の車の中で咲く花よ 白 峯
 宿替へに子供の心考へる よし み
 宿替にちと氣にかゝる井戸があり 秋 月
 宿替をして出獄を待つと決め 同

夕立に夜店も人も走りだし
 妻と来た夜店手相を見て貰ひ
 赤い電球付けて夜店のスイカ賣り
 夜店から買つて歸つてもめてある
 夜店まで来て逢引は引返し
 不具の子に美し過ぎる 夜店の灯
 片附けて夜店 風呂敷だけとなり
 残業の火鉢に手あり 足もあり
 玄關に火の無い火鉢はいをさり
 借りて去ぬ氣持火鉢へ座りてみ
 今日も亦火鉢にもたれ 不具の子
 長火鉢別れ 話に火も消えて
 縁談へ火鉢を離れ 聞いてゐる
 乗換の穴に車掌も負けてゐる
 横斷路さつきから立つあんなさん
 盲人の杖に引かれてゐる 若さ
 電報に嘘母だなと胸さわぎ
 電報を握り涙の中へ來る
 電文は三期の君に知らずまい

謙 公 人 月 人 秋 人 變 人 同 人 兎 石 岩 石 變 人 岩 石 千 成 白 峯 兼 福 岩 石

散 髮 髮に型を變えても三枚目 柳 石
 散 髮 髮屋弟子の表彰状もかけ 曉 童
 散 髮 へ杖が淋しく待つてゐる 柳 石
 廻り椅子散髮代がちやらついた 同 明
 散 髮 髪屋日本人を妻に持ち 香 方
 犯人のざれもが愛に飢えた顔 柳 石
 犯人がひさり貞操保證する 香 方
 犯人と刑事の顔が比較され 曉 童
 犯人へ櫻の花が咲きました 柳 石
 立志傳村を追はれた事も書き 柳 庫
 秋祭村一ぱいに太鼓鳴る 心 府
 村祭 樟 樹 臭い 着物きる 曉 童
 村長の養子二枚目買ふて出る 香 方
 地圖に無い我が故郷はこの邊り 香 方
 村社をば昇格させて秋祭り 柳 方
 ソバの花村を追はれた月の下 柳 方
 赤さんば村に一人の疑似コレラ 童 方
 裏通り自動車道に出て歸り 香 方
 裏表紙正宗とあり秋の風 曉 童

川柳 雜誌社 今治句會 (今治)

十月二十日

於貯蓄銀行支店

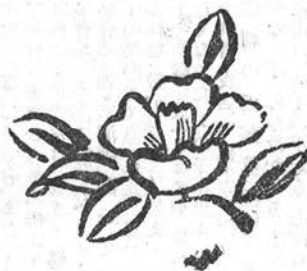
月原宵明報

電報をもつて苦しい借に來る 岩 石
 電報で知らず男の兒が産れ 變 人
 秋晴れへキトクの文字讀みなほし 白 峯
 運轉手あはてた奴を怒りけり ライト

フエルトの裏がみじめな旅役者
蝸牛笹の葉裏にむすぶ夢
蟻の穴獲物へあまり小さすぎ
節穴の陽に鶏が砂あびる
口笛を吹く子の頬の大人めき
口笛をふき日本の着物着ず
口笛へ二階黙つて顔を出し
子へ吹いてやる口笛さなりけり
川柳
維誌社
松山十七日句會 (松山)
十月十七日
酒井大樓報
王樣、順番、浪花節、蜜、冬木立
王樣的木履の先へ訴へる
闇冤王酒亂の相に見へ申し
漂流をして王樣さ會見し
着飾つた象に王樣乗り給ひ
王樣的いつち綺麗な寶塚
王樣を圍んでレビエウ暮さなり
王樣へ裸女三千の夜は更ける
木戸口に順番をさる人氣なり
順番はまだなり發車ベルは鳴り
運は天任せ順番通り來す
常連さ見へ順番のないう足
順番へ邪冤な百圓札を出し
順番にせよと後ろで太い聲
連れた子の泣いて順番譲られる
やいこしい名で浪花節偽せられる
浪花節反り身になると節になり
浪花節隠居へ呼びに行くラジカ

浪花節佳境に入るミブツリ切り
なめくじのごう行くつもり壺のふち
落ち桐に抱へた壺のおきごころ
墨壺の端を大工に頼まれる
灼熱の戀を知つてインキ壺
青春期今日も用あるインキ壺
變くこな茶壺さすつて怒もなし
冬木立授業の窓へ影が伸び
冬木立風は北から南から
冬木立カイドガールは暇となり
而笑子追悼句會 (松山)
十月三十一日 於五健居
酒井大樓報
追悼句 奇人 九、石鏡山
流行歌
満天の月ばれ渡り而笑子忌
先生を思ひ出させる沙魚の秋
短冊にその面影を想ふ秋
而笑子忌菊の香りを偲ぶ秋
十紫近くさうな夜長の而笑子忌
社で逢ふた時の顔まだ忘れず
松山に育つ根強き緩柳
菊によし月にもよしの而笑子忌
源兵衛に揚場に秋の偲ぶる
奇人の髭へ淋しさの増す
社會記者奇人さ云ふをものにする
先代の餘徳で食つて居る奇人
奇人ぶる其れも一つの處世法

奇人今日涙の過去へさかのぼり
世間から奇人にされて居る無口
何時仕事するのか奇人何時も留守
奇人遂に死んでしまつた
奇人まだ俺が乃公がで老けて行き
飯を食ふ顔は奇人の顔でなし
生活の貧あり奇行の徹底し
奇人サト奇行さ云ふに氣を使ひ
奇人もう語りたくない眼を閉る
イイ娘奇人の父に縁遠し
十九まで丁稚で住んだ立志傳
二次會にツイ勝はれる九時前後
厄年の十九へ無事で大晦日
九十九習ふ子へ拾縫ふ手が遅れ
おかしさをたしなめられて十八九
青春さ帯にも見せて十八九
午前九時社長の前出勤薄
腕時計九死一生の時を指し
九星も知らず若さのはち切れる
石鏡の裏へコスを伸す秋
石鏡へ女覺悟をして登り
男裝さ知つて追ひ越す二の鎖
石鏡の嶺より高い今朝の秋
石鏡を二つに割つた朝の雲
石鏡の峰くつきりさ秋に成り
ハイキング石鏡山は高過ぎる
石鏡の行者凛々しき男性美
石鏡の先達天狗信じきり
ボータブル櫻の下の流行唄
チウすたる頃に覺へた流行唄



柳界展望

全國川柳界のこゝ、各地川柳家の一舉手一投足をこの展望欄ですぐわかる様にしたい。皆様の御通信を歓迎する。

今後の御發展を祈る。

▲恒例の川柳雜誌社京阪神各支部聯合主催の忘年大會は十二月十三日夜道頓堀俱樂部で盛大に

▲十二月十九日農園バーラーで
畔柳社歳末小集が開催され諸君
から寄書を頂く。

▲みすか川柳社では十二月十九日忘年句會を開催されたとのこと。

▲廣島へ榮轉した植山九天君によつて十二月一日鐵道クラブで第一回の句會を開催された由。

1ル名古屋川柳團事務所）川・
協の頁参照。

▲静岡川柳會(静岡)では十二月十五日同人の忘年會を開催、朗らかな諸君の寄書に接した。

▲阪大川柳會の忘年句會は十八日夕惠濟館三階で路郎師を迎へ開催された。

▲住友金屬鑛業所親友會(尼崎)の忘年句會は二十四日夜路郎師
 艸樂君機見女を迎へて同所内に

開催、路郎師並艸樂君の席上、
毫の短冊を抽籤によつて出席者
に頒つ等和やかな會であつた。

▲本社鶴町支部の忘年會は廿日夜キングで開催眞摯なぞして又和やかな集ひであつた。

吟社の創立

▲東京市京橋區西八丁堀三ノ十二牧君方に「川柳京橋吟社」が創刊第一號を發行された。

創刊と廢刊

▲前川句人、三輪九文錢兩君
(大阪)の手によつて川柳研究紙

柳詒要目
(十二月號)

柳窓漫筆

和田天民子（川柳俱樂部）

青天につながるもの

宮崎斗白(秋田川柳)

自己に還る（古川柳評論十二）

堀口塊人(昭和川柳)

新人の資格と現状打破

川上日車(氷原)

人間法則と物の法則（自由律川

柳の是非三

木村半文錢(氷原)

川柳への發展（上代文學への一考察）

石崎柳石（川柳みすか）

餘技・社會漫潤・句集

（昭和十一年の柳壇を回顧）

塚越正光(川柳きやり)

柳壇現狀悲觀論(時評)

品川陣居(川柳きやり)

自由律の發生と其の意義(完)

木村半文錢（芥子粒）

「はぎの茶屋」が發刊された。

消 息

▲西田紳樂君(大阪)は甥の朝鮮人營を見送る十二月四日郷里丹波へ赴かれ五日歸阪された由

▲吉田水車君(名古屋)は十一月下旬から中耳炎で病臥され大分快方に向はれたこの事。

▲川柳きやり吟社では、林世香船橋呂香、鈴木可香の諸君の推薦により坂部車前草君(名古屋)を社人として迎へられた由。

▲川柳雜誌の前號を故岡田三面子博士の御遺族に贈呈したところ、御令息岡田美津男氏より次の如きお便りに接した。「前略川柳方面の諸兄より多大の御厚情を賜り今更柳友諸賢の御厚誼に感謝致し居る次第に御座候。御

掲載の父の書狀の日附の件、發病當初相當重態にて意識不明や、安靜後當時の記憶なく諸方へ差出したる手紙類皆八月を除き未だ七月のつもりにて差出したるものなり中略、特に三男としてあの記事小生一生の指針として長く座右に備へ置くつもりに候後略」

▲西村山月君(大阪)は春日丘に此程新築落成、十二月廿日に移轉された由。

▲福田山雨樓君(東京)は十二月六日の故錦浪追悼句會に出席された由。十三日は柳友會に出席して遙かに本社を偲べられたこの御たよりに接した。

▲ガリンピック水上遠征軍の總代表本社賛助員末弘殿太郎博士はドイツより十二月十七日歸朝された。

▲川柳雜誌社松江支部同人奈良井柳人君は同市寺町の米田家へ養子縁組をされた由。お喜び申上げる。

▲川柳風呂社(松江)同人伊藤美紗子女は十二月二日逝去された由謹んで哀悼の意を表する

改 號
▲奈良井柳人君は米田番作

轉 居

▲小原吉左右君(神戸灘區岸地通り四丁目トキワアパート内五號室へ) ▲田中吐句堂君(松本市宮村町へ) ▲棚瀬正孝君(熊本縣阿蘇郡永水村字赤水停車場前出水屋旅館内へ) ▲高添素朴君、(兵庫縣川邊郡立花村尾濱西末四〇六十六號) ▲川柳ビル發行所(京都市上京區西洞院下長者町下上田 枯粒方へ) ▲西村山月君(大阪府三島郡春日村字春日の丘四〇〇へ) ▲上村壽夫君(高知市西唐人町一へ) ▲柳友會事務所(東京市蒲田區女塚町二〇三へ)

其 の 他

▲世界の科學界に巨人の足跡を印する長岡半太郎氏(本社賛助員)が科學、社會、人生の各方面に亘り多年の尊い生活體驗から生れた隨筆を改造社から發刊された。

愛知縣名所川柳(六)

鈴木可香(川柳草薙) 鑑賞十句(三)

櫻井六葉(梅鉢) 川柳國名盡(十)

大田秋水(靜岡川柳) 日本史傳川柳狂句(六)

故岡田三面子(三味線草)

川柳指導講座

講師 塚越正光氏

課題 「煙草」 一人一句

締切 一月末日

投句 本社宛「川柳指導講座

句稿」と明記する事

柳壇四編論議(廿二)

諸案(三味線草)

冷汗もの語

花岡百樹(番傘)

木村氏の「試作」序論

川上日車(川柳ビル)

明治から大正へ(江戸から昭和の警察) 一十二

植木鬼佛(川柳研究)



編 輯 縱 横

▼明けましてお芽度う。

▼誰の顔を見てもヤア／＼と云ひたい気持ちになつてゐる。矢張り春はのどかだ。

▼本誌の如きは春が来たからとて、別にカサで賣らうといふ雜誌でもないで、その點バタバタ騒ぐ必要もないが、それでも新春特輯號と名がつけば、特輯號らしい内容も盛られねばならぬ、原稿を頂くためには相當關心した。お陰で百華攘亂の姿だ。本年も相變らずの御支援御愛讀を祈る。

▼私は一九三七年から川柳の象牙の塔に閉ぢ籠もるつもりであるが、昨夏の改組で第一線も第

一線、「川・雜」を箇人經營で引受けることになつたので、一段と努力を續けることを約束したい。尤も一面、著述もやりたいたと思つてゐるし、川協の仕事も私の健康の許す間に少しは目鼻をつけて置きたいと思ふが、なか／＼ウカ／＼してゐられな

い。

▼揮毫嫌ひな私も昨年は相當に筆を握つた。私の書いたものに代價を拂つて下さつた方々に深謝してゐる。本年はもつと、いいものを作つて見たい慾もあるが、いくら書いても自分で満足出来ぬ、あの息ぐるしさか考へると、肩が張るのか覺える。

▼本誌の特輯として定評のある「日本柳壇百人撰」を一瞥するのには本年は九九パーセントの好成績であつたが新進作家の進出が夥しかつた。これは一九三六年の柳界が新進の擡頭したことを示すもので、まことによろ

ばしい現象であつた。同時に老大家の復活組さへあつて、本年度の戦ひに豫斷を許るさぬのも愉快だ。玉句を寄せられた各位の柳運長久を祈る次第である。

▼待望の「武玉川三編研究」が愈々本號から掲載されることになつた。御愛讀を乞ふ。

▼京大の須原退藏氏から「武玉川二編研究を讀みて」が届いたこれは前號所載の武玉川二編研究の研究中に掲載すべき貴重文字であるが、前號刊行後に着したので、本號に收載した。

▼福田山雨樓君が「川柳十德」を寄せた。川柳宗に生きてゐる山雨樓君らしい句ひの高ひ原稿である。ただ理屈つばい議論や蒼白い句を作つてそれにいろいろ理論づけてゐる人たちよりも堅實な足取りを見てゐるだけでも愉快である。

▼新年原稿としては生方敏郎氏の「川柳新年」大島濤明氏の「川

澤 田 小 兒 科

醫學博士 澤田四郎 作

大阪西區成玉町一本丁目

電話 天下茶屋二九三番

柳に詠まれた牛のいる／＼」があり西田岬樂君の「土人の酒を造る」も又變り種のものだ。

▼山本丹路君の「川柳隨想」は頗ぶる靜觀的な環境描寫で、炬燵で讀むのにふさはしいものである。

▼子澤山の森東魚東氏が「子供の世界」を寄せられた。子のあるなしにかはらず初春の好讀物である。

▼色ページの漫畫セクションはオサカ・マンガ・トリオの同人小川武、樋口ヒロム、北幹夫の三氏にお願ひした。その力作によつてお正月らしいのんびりさを味つて頂きたい。

▼たかみ・あきを氏の「國旗のウラおもて」は常識涵養の好文字だ。この一文によつて目と鼻の間にあるものでも知らないことが多いことを教へられる。

▼失禮な聞き方をした「暮の財布」の筆者にお禮を申上げる。

暮の財布なんか調べて、どうする氣か、さ聞かれても困まるが財布の中には錢以外に何かひそんでゐるやうな氣がしたので、

賀 正

新春改曆の嘉辰に方り
謹みて 聖壽の萬歳を
壽ぎ奉り併せて川柳家
各位の御清福と倍舊の
御支援奉希上候

敬白

昭和十二年元旦
川柳雜誌社

麻 生 路 郎
麻 生 菫 乃
竹内 機 見 女

一寸調べさせて貰つたのである
▼曾て本誌に漫詩を寄せられて好評だつた長野晴濱氏から歌辭

「行路集」を頂いた。毎號少しづつ發表して川柳人の視野をひろめたいと思ふ。

▼「川・雜」初春句會は宵戎の一月九日の夕べに、大阪朝日新聞社三階大廣間で開催することにした。内機洩らすべからずで詳しくは書かぬがオサカ・マンガ・トリオ同人が席上の句を漫畫にして頒つのもその一つで、頗ぶる期りかな集りである。何はさて置き出席して宵戎の吉兆は「川・雜」の初春句會から擲まれたい▲私は暮の廿八日夜、大阪文家協會の忘年會に出席したが同夜、市立今宮保護所へ出かけルンペン諸君が作句した兼題『タクシー』の選句をした。

▲大阪朝日から、來年の實行したいことを訊かれたが、私は現在してゐることに拍車をかける以外にない旨を答へた。それほど。川柳のために一生懸命である。

科 兒 小 ・ 科 內

院 醫 洋 漢 和

一 成 川 谷 長 士 博 學 醫

目 丁 一 橋 堀 長 區 南 市 阪 大

番 八 八 一 四 南 話 電

(順はろい) 々人の係關社

正 賀



賛助員
池澤樂居
長谷川一徹
大田弘雄
岡本直平
片岡直方
笠原路生
嘉納純二
田中長秀
長崎柳二
長岡牛太郎
長野晴演
藤枝史郎
藤村史郎
藤本卯之助
額原退藏

客員
赤井清司
浅田太一
末弘殿
伊藤彦造
鳥山一歩
沖野岩三郎
大島瀧明
大谷五三郎
大西長三郎
小川武
龜井晟修
川上三太郎
川村花菱
米村あゐ馬

田村孝之介
谷脇素文
生方敏郎
高尾亮雄
窪田銀波樓
安川久流美
前田雀郎
前田五健
食満南
柴谷宰二
篠原春雨
蛭子省古
藤里好古
小林不浪人
森東魚

川柳雜誌社

社主 麻生路郎

事 幹 と 部 支

道頓堀支部(大阪市)	九三支部(大阪市)	神戸支部(神戸市)	函館支部(函館市)	高知支部(高知市)	梅田支部(大阪府)	蟹ヶ池支部(大阪府)	田邊支部(和歌山)	京都支部(京都市)	鳥取支部(鳥取市)	松山支部(松山市)	御旅支部(大阪市)	天王支部(大阪市)	鶴町支部(大阪市)	御池支部(大阪市)	松江支部(松江市)	西條支部(愛媛縣)	大鐵支部(大阪市)	光里支部(大阪市)	今里支部(大阪市)	今治支部(今治市)	光笑支部(大阪府)	伯耆支部(鳥取縣)	竹原支部(廣島縣)	十支支部(廣島縣)	臺中支部(臺中市)	兵庫支部(神戸市)
幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事
庄萬	北山	喜多	龜井	水谷	河津	辻左	尼石	明島	酒井	須崎	宮崎	西崎	勝谷	山本	荒井	竹内	廣原	月原	永田	松井	淺野	宮崎	三崎	陽幸	兵衛	

川・雑・案・内

六期市字十四字第三行金五十銭、一行増すごとに金一銭、但し前金切手代用可、改題、改題、金案内、柳事廣告、その他

1936年の

合本 (第十三卷)

を机上に備へて春を迎へませう。

頒價金 參圓

送料 大阪市内一冊六錢
市外一冊廿四錢御註文は川柳雜誌社へ(前金)

投句用箋

御投吟は本社投句用箋を御利用下さい

五十枚綴 二冊 金十二錢 (送料共)

御申込は川柳雜誌社へ

切手代用も可

路郎先生染筆

路郎先生筆、掛軸、横額小物、短冊を川柳家に限り左の通りで頒布致します

軸箱入二拾圓・額二拾圓
小物五圓・短冊參圓
御込は前金で發行所へ

合本特賣

川柳雜誌の合本第二卷より第十卷まで

各一卷 金壹圓五十錢
第十一卷及第十二卷 金參圓
送料大阪市内一冊六錢
市外一冊廿四錢

御申込は前金で川柳雜誌社へ

後の葉柳を頒つ

大正八年に出してゐた「後の葉柳」の残本が僅かばかり出て来たのでお頒ちします。日車、半文錢、路郎の三氏の句しか載つてゐない樹形四頁もの全三部で十錢、二錢切五枚お送り下さつてもよろし。

川柳雜誌社宛

「川柳雜誌」

創刊號より十卷迄

某氏の所有、希望

者に安價に譲る

(姓名在社)

殘本分譲

川柳雜誌の殘本が少數ありますので、左の通りで分譲申上ます

第二卷より第三卷迄 一冊十五錢
第四卷より第十一卷迄 一冊十五錢
第十二卷 (送料一冊二十錢)
御申込は前金で川柳雜誌社へ

懸賞川柳

課題「姿見」二月十日
用紙は官製ハガキ(化粧柳壇ミ明記の事) 選者麻生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先 大阪市西成區玉出本通三ノ三六 麻生路郎氏方

化粧新聞社柳壇へ

川柳を作る人、愛好する人の必讀誌

川柳俱樂部

毎月一日發行
一部廿錢・送料一錢
東京市牛込區拂方町一四
川柳俱樂部社

川上三太郎主宰

(毎月一回發行)

川柳研究

異色ある本誌の創作欄は初心者への入門欄をアツタは絶對に見逃してはいけません
見本希望者は二錢切手十枚同封左記へ
東京市王子區上十條町八五〇
發行所 川柳研究社

川柳きやり

菊判每號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢

東京豊島區高田本町二ノ一四
六八
川柳きやり吟社

謹・賀・新・春

綏遠問題の中心現地察哈爾省張家口より目前の雲
行を案じつゝ今年には支那で新年を迎へました。皆様
の御想像以上不便な遠き奥地なので本年は誌上のみ
で年賀缺禮致しますから不悪。
遠國より皆々様の御健康を祈り倍舊の御指導御交
誼を乞ふ

中華民國察哈爾省張家口東安大街十七號

カフエーオペラ

同岩崎松柳代路
電話二三五番



明けまして

おめでたう

大阪玉出驛西

喫茶 洋酒 **キング喫茶店**

電話天下茶屋二五七九番

本年も相變らずお引立の程

祈り上げます

支那北京料理
佛蘭西風茶房

宴會に御集合に

紅 噉 光

電話南一一八六番

市電夜橋電停西御堂筋東北角

洋食 喫茶 **カナメ食堂**

大阪市南區周防町疊屋町六
電話南七五五一番

大 阪 ◆ 三 越

天 守 閣

凡 蛙 七 壽 東 獨 双 無 靜
路 郎 步 々 武 光 行 葉 限 山

占 朴 新 山 道 蹇 不 行
山 堂 兒 水 緒 々 樂 凡 人

木 林 白 廣 斗 六 入 空 落
守 果 水 々 見 咲 舟 栗 丁

阪 大 川 柳 會

大阪帝國大學醫學部內

みすか川柳社 (イロハ順)

石 崎 柳 石 武 田 紫 陽
原 亀 水 津 吉 一 帆
西 原 一 穂 嚙 谷 步 人
和 田 仙 海 矢 野 蛇 之 磨
片 山 弦 月 菊 地 香 方
武 田 笑 兒 廣 川 紫 朗

謹・賀・新・春

躍進又躍進の

川柳きやり (一部二十五銭)

川柳きやり吟社

東京市豊島區高田本町二ノ一四六七

振替東京六六三〇五番

川上三太郎・大谷五花村編輯

「川柳研究」 一部二十一銭

川柳研究社

東京市王子區上十條町八五一

振替・東京九四〇四六番

二十五周年を迎へる

「番傘」 一部二十五銭

番傘川柳社

大阪市北區堂島北町一六

振替大阪七六九四四番

賀 正

賀 春

月刊 昭和川柳

昭和川柳社

大阪市北區伏見町五

謹・賀・新・春

川柳社御池橋支部

村松夢裡

大阪市住吉區住吉町一七二七

後藤青兒

大阪市東成區生野ヶ丘

西 いわを

大阪市東成區南生野町二ノ六二

川柳社誌

梅田支部

川村觀月

中辻冬扇

酒井斗風

天野卜居

薦野雨聲

林朔風

辻遊歩

松枝靜波

増元翠陽

水谷鮎美

宮脇大嶽

田邊由布

前川正風

川柳雜誌社十三支部幹事

村瀬琴泉

竹村鐵心

淺野牧人

事務所 大阪市東淀川區十三東之町四ノ二二一

淺野方

川柳雜誌社今治支部

今治市東門通一四六〇 石手向上庵

今治市東門通一四六〇 石手河鹿

今治市寺邊 渡邊曉童

今治市米屋町一丁目 谷心府

愛媛縣越智郡櫻井町 月宵明

今治市神明町 長野文庫

謹・賀・新・春

川柳雜誌社

神戶支部

八日西喜真小

原田多村野薙

吉幸春明華刀
左

郎水珠秋捐右

川柳雜誌社

鶴町支部

妹加照兼上福淺岩松永宮

藤屋尾山田神橋下岡川

ラ福よ千録
變寬太し柳
白秋岩

人ト柳郎み兩公石子月峯

信州湯田中温泉

湯の村發行所
柳風會

電話湯田中十七番

本年は筆不精きつとやめます

靜岡市寺町四丁目

昭和十二年元旦

靜岡川柳會

榎田

孝柳珍
葉竹
坊女林

月刊靜岡川柳——金拾錢

近代標準價值を示せる

月刊同人
年誌代部十錢
一圓

●大島無冠王編輯●清新潑刺たる新春特輯號を御覽下さい！

京都市中京區六角油小路西

發行所
川柳同人社

謹・賀・新・春

池澤樂居

大阪府高石町北六二六

伊志田孝三郎

名古屋市中區幸樂町二丁目

澤田四郎作

大阪市西成區玉出本通一丁目
電話天下茶屋二九一三番

多喜健一

大阪市東區北久寶寺町五丁目二
電話船場四九五六番

梅本秋の屋

謹・賀・新・春

高島玉兔朗 東京市日本橋區 堀越町四ノ一	長崎柳秀 大阪帝國大學醫學部	米本貴志子	阿部閑生 豊中市千歳通二丁目
横山勝二 兵庫縣寶塚壽樂莊	戸倉普天 兵庫縣川邊郡 川西町鶴ノ莊	石田沐天 大阪市西淀川區 海老江上三ノ五七	富士野鞍馬 東京市杉並區高圓寺 六ノ六八五
橋本言也 京城府永樂町二丁目八四	町田承春 愛媛縣伊豫郡中山町 藝備銀行中山出張所	高峰柳兒 長野縣須坂町	阿部佐保蘭 東京市小石川區初音町四 電話小石川四八四一番

謹・賀・新・春

福田山雨樓

勤務 東京鐵道省 工務局 人事
住所 横濱市保土ヶ谷三三三

山本丹路

大阪市住吉區帝塚山中二ノ三八
電話 櫻川 五二四五番

橋本綠雨

橋本美奈子
橋本靜江

大阪市住吉區平野西之町八三
電話 天王寺 一一六七番
振替 大阪 二九四五九番

カナメ食堂

永田里十九

大阪市南區疊屋町六番地
電話 南 七五五一

西田艸樂

住所・大阪市東區元伊勢町昭和園
經營・日の出化學研究所

住田亂耽

兵庫縣武庫郡魚崎町五九八二
電話 御影 二八五七

謹・賀・新・春

高橋 かほる 大阪市南區北炭屋町 二〇一電話五九六番	北山 悟郎 大阪市東淀川區本庄 川崎町三ノ一二三	吉田 水車 名古屋市中區南大津町 共濟ビル山武商會	關本 雅幽 大阪市住吉區田邊 本町七ノ三二
朝田 新水 大阪府北河內郡三郷町 西橋波五六九 電話守口二五五番	福田 鶴峰 大阪市住吉區平野 西之町七一	須崎 豆秋 大阪市住吉區旭町三 電話天王寺一〇一五	植山 九天 廣島鐵道局經理部調査課 廣島市東雲町五五八
姫田 夕鐘 大阪市港區西田中町四ノ四 港局私書函三十七番	大西 八步 大阪市東區博勢町 一ノ一八(竹中方面)	尼 綠之助 川柳雜誌社篠川支部 島根縣今市町	中島 鐵洲 川柳雜誌社鳥取支部 鳥取市川端町一丁目 電話二八八番

謹・賀・新・春

川柳雜誌社大鐵局支部

畔柳社

大鐵局經理部調查課
幹事 山本喜山

原美靜流

現住所
岡山縣阿哲郡上市村大字
井村足立三八〇四
勤務先 伯備石灰會社石立事務所

不朽洞會

大阪市西成區玉出本通三
川柳雜誌社 內

川柳雜誌社

兵庫支部

神戸市兵庫區今出在家
一丁目二〇三崎陽幸方

米林舞蝶

キンケ管理髮館松坂屋東八角

庄万よし

大阪市南區難波新地二番丁
都民新聞社

川柳雜誌社

西條支部

愛媛縣新居郡西條町
荒井英賀夫

西村山月

大阪府三島郡春日村
宇春日の丘四〇

『羊』川柳グループ一同

大阪市西區奧美町八
樋口商店方羊編輯部

川柳雜誌社松山支部
幹事

酒井大樓

川柳雜誌社松江支部

勝谷山川兒

工藤清寫眞館

肥後橋南詰昭和通西南側
電話 土佐堀 五五五〇番

謹賀新年

工場の汗正月を寂しめます 雨迷

監査役 山本彌一郎

大阪市東淀川区中津濱通一
電話 北三八〇五

いろは習ひおぼえて今年四十八 一歩

専務取締役 鳥山隆夫

大阪市東淀川区國次町二九七

取締役社長 淺海治平

大阪市北区曾根崎新地一丁目

株式會社
合成化學工業所

本社 大阪市東淀川長柄中通二丁目一〇番地
電話 堀川(35)一二八七番

酒



清

ハクツル



元發

嘉納合名社

大阪・東京・神戸・京都・仁川・大連・奉天

大阪の古本屋

大阪道頓堀

天牛本店

電話南二七四八・二七四九番
振替大阪五六六五〇番

大阪市道頓堀筋日本橋南詰東入濱側

天牛第二書房

電話南(75)一五六三番
振替大阪七一五四三番

高尾書店櫻橋店

電話北七〇〇七番

大阪市西區南堀江通一丁目

荒木伊兵衛書店

支店 朝日ビル二階専門大店

大阪市南區西清水町八番地

古典繪
一般 石川清和堂

振替大阪七三五八一番

大阪市南區八幡筋

古典と錦繪 杉本梁江堂

電話南二一六番

大阪市北區櫻橋交叉點

櫻橋日より
毎月刊行 カズチ書店

電話北七五六五番

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話南五六二番

菊正宗

宮内省御用達

株式會社

本嘉納商店

磨齒ンオイラ

賀正

天地一新、茲に初日麗かなる曙春を迎へ、
 謹んで年頭の事を獻げまつると共に、各位の御
 清福を奉賀候。願れば、客年中は一方ならざる
 御支援御同情を蒙り、御蔭を以て、社運の進展
 聊か記録すべきもの有之候のみならず、益々弊
 社製品に對し、愈々深き御認識と御信頼とを辱
 うし候段、寔に難有仕合に存じ、厚く御禮申
 上候。今や社を擧げて感激の眞只中^{まこと}に在り、至
 誠以て御難題に副ひ奉らん事を期し居候へば、
 何卒本年亦、不相應格別の御引立を賜り度、
 御祝詞と共に懇願如此に御座候。 謹言再拜

昭和十二年元旦

ライオン磨齒本舗

株式會社 小林商店

東京・大阪・名古屋



臺所炊事手袋か
らの冬

つい派手に炊事
手袋米を研ぎ

主婦、家政婦、炊事婦の護り
氷點下の外氣、水溫も浸透せず

特選ゴム製メリヤス裏でホントに温かい

定 價	
メリヤス裏	一號一組
薄手裏	一號一組
二號一組	二十錢
八號一組	十錢

藥店、百貨店にあり
品切の節は本舖へ

ムネタの 炊事手袋



發賣元

ムネタ
宗田新商店

大阪市東區道修町二

電話北濱(四八六三)

振替大阪四九八

アサヒスタウト

濃厚な風味
爽快な香り
独特の酸味
栄養豊富



達用御省内宮
社會式株酒麥本日大

獎推 士博學醫林梅
査監 士博學醫瀨片

錠ムーユシルカダブ

安産

母性愛の達成へ

母性愛の發露たる妊娠は眞に女性にとつての重大任務であります。更にこれを達成せしめることはワダカルシュームの使命であります。即ち母体と胎兒の保護榮養に任じ、悪阻期を安全に経過せしめ、偶發する諸病を未然に防ぎ、子宮の收縮をよくする爲め安産せしめますから、産後の守護神として御信任を頂いてゐます。更に授乳期には、母乳を豊富にし、乳質を改善する外、母体の容貌、毛髮、齒牙の悪化を防止し、乳兒も随つて健やかに育成されますから、凡ゆる女性を朗かな圓滿な家庭の人とします。片瀨醫學博士述「安産のために」進呈

のため
に

代時ムーユシルカ てし設建を

茲に二十年、幾十萬の妊娠婦諸姉が、「ワダカル」の偉力を讃讃せられつゝある事實と、我國カルシューム學界の泰斗、大阪醫大教授片瀨博士の、二十年一日の如き熱意と努力により、不滅の城域を築きました事は、弊店最大の誇とする處であります。

安産！安産！安産のために
「ワダカルシューム錠」



店商助卯田和 町修道坂大

● 劑ンモルホ性男の準標 ●

本品は在來の臟器製劑等とは異り、世界最初の化學合成に依つて得たる純粹男性ホルモン結晶を主成分とし、注射液は毎筒必ず一瓵（二〇鷄冠單位）内服用錠劑は每錠〇・一二瓵（二・四鷄冠單位）の純粹結晶を含有し力價恒に一定、奏効全く確實、副作用絶無なる標準男性ホルモン劑なり。

更年障碍

退減力憶記・退減力精・怠倦・頭痛
等化退の腺殖生・退減力動活力聽視

性神經衰弱

性・乏欠慾性・漏早・退減力起勃
病神經及弱衰經神的性・退減感

一般衰老現象

他其病胖肥・進亢壓血・化硬脈動



裝	包
錠劑（内服用）	注射液
三〇錠	5管・10管
一〇〇錠	
二五〇錠	

嘉寶化學研究所
嘉寶物產株式會社藥品部

大阪西區阿波堀通一丁目十番地
振替大阪七五二八番
東京市橋區銀座三丁目正宗ルビ

製造所
發賣元

本店
支店

若返りに！
ジ
ン
ホ
ル
モ
ン

● 内服用 ●
● 注射用 ●

文獻贈呈

投稿規定

- ▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。
- ▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。
- ▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
- ▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
- ▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」を封筒に朱記の事
- ▲締切は嚴守されたし。
- ▲投稿其他につき御問合せはすべて返信封入の事。

募 集

第十四卷 第四號懸賞課題

二月五日締切

(十句以内)

落花 麻生路郎 選
惡戲 池田可宵 選

第十四卷第五號懸賞課題

三月一日締切

(十句以内)

浪人 小林不浪人 選
襟足 山本丹路 選

每號募集

近作柳樽(雅吟)麻生路郎 選

各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

懸賞句規定

- ▼天地人三位に粗品を呈す
- ▼一般應募歡迎

價 定

一 部 金三十錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

料 告 廣

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいませ。御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です。○諸代受領は送金によつて御承知願ひます。○送金封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい。○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます。但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます。○御注文には何月號よりご御指示願ひます。○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十二年一月十日印刷
昭和十二年一月十五日發行

第十四卷 第一號
(毎月一回十五日發行)

禁 無 斷 轉 載

編輯兼發行印刷人 麻生幸二郎
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

川柳雜誌社

發行所

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

支社 東京市蒲田町女塚町二〇三
川柳雜誌社東京支社

店書捌賣

(大阪)大賣捌大賣書店 參文社 明文堂 其他市内各書店
(東京)三味堂(神戶)米田、寶文館(函館)石塚(京都)國屋(名古屋)靜觀堂

にきびとり 美顔水

ご家庭に常備せられたき

美容衛生薬

ニキビ吹出物に有名なる良薬である上に、日常美容薬としても勝れた効果があるので男女共に廣く賞用されてゐます

主なる用途

- ▲ニキビ吹出物の治療と予防に
- ▲洗面後、入浴後、お顔のりし等の後の保護と整美に
- ▲美容薬として御常用に
- ▲蚊・蚊・南京豆等の毒目にかまれた時に
- ▲肺病性の方のお化粧下に

定 價
30 セン
50 セン
1 エン

